

鴻 臚 館 跡 5

—平成5年度発掘調査概報—

1 9 9 5

福岡市教育委員会

鴻臚館跡 5

—平成5年度発掘調査概報—



遺跡略号 FUE-22
調査番号 9326

平成 7 年

福岡市教育委員会



調査地周辺航空写真

(1) 第1トレンチ
第2検出面全景
南から



(2) 第1トレンチ
第2検出面SA06~08
西から

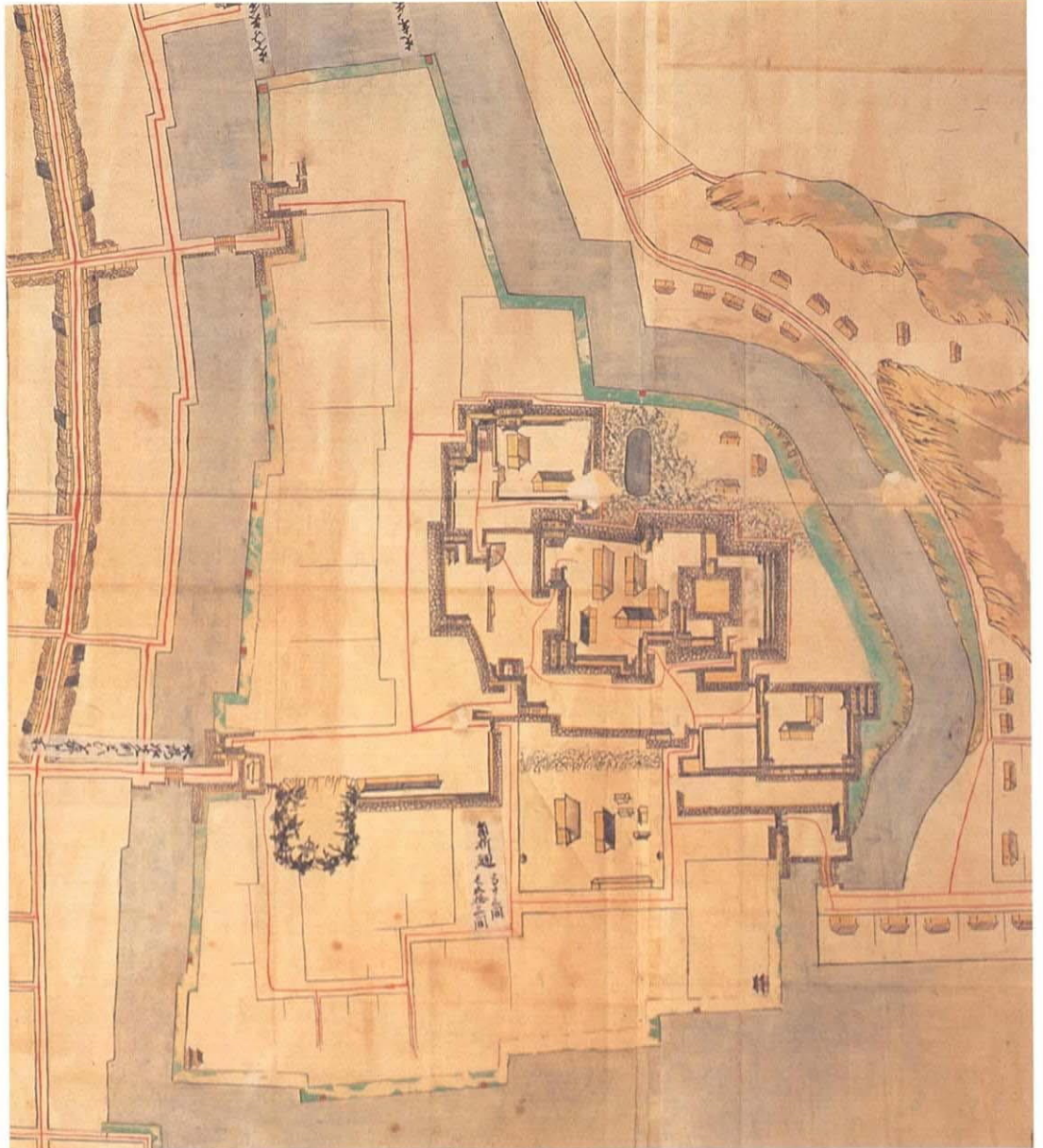


(1) 第5トレンチ
第2検出面南半部
南から

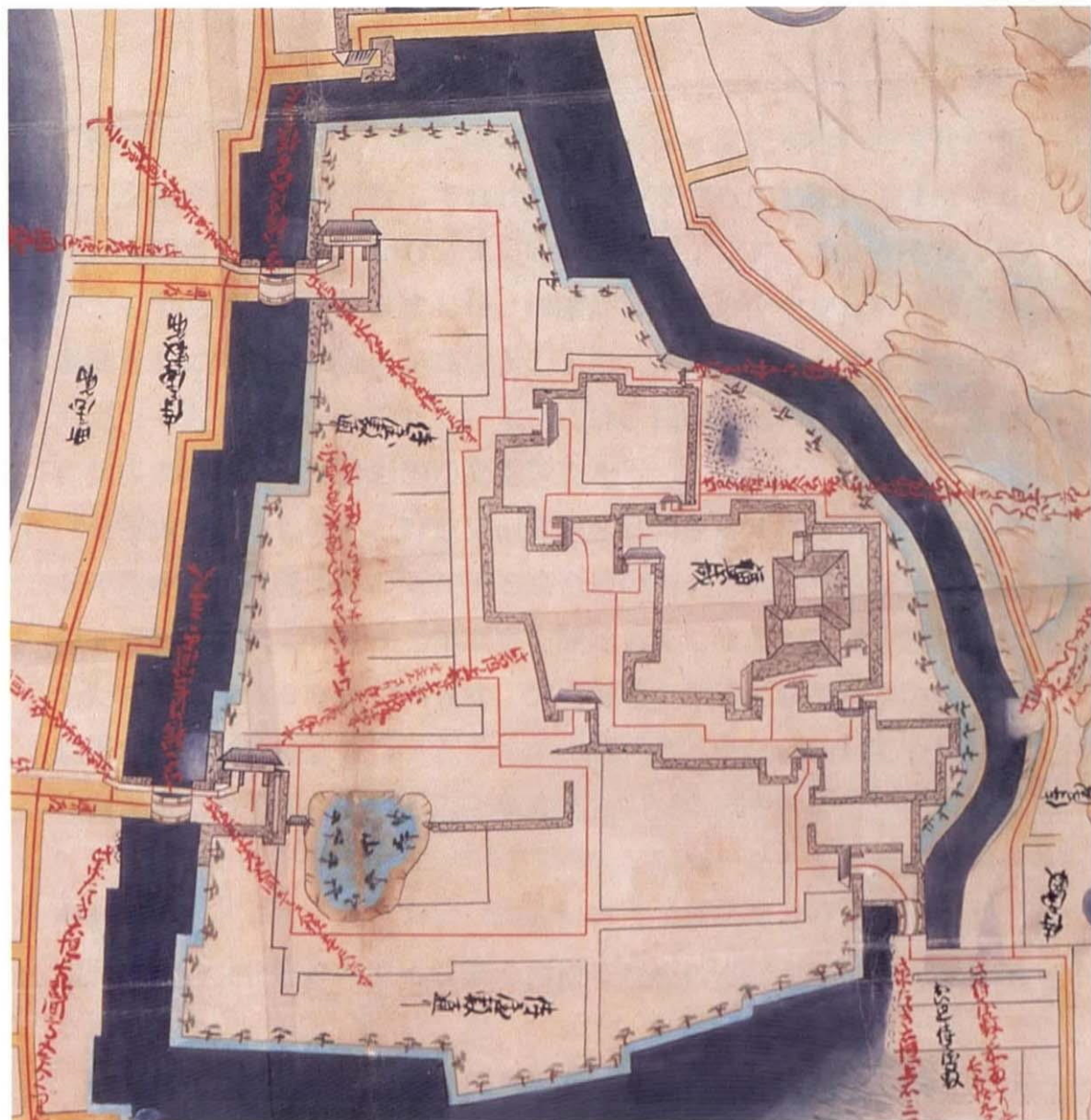


(2) 第7トレンチ
第5検出面SP101～105
南から





福岡城下之絵図（九州大学九州文化史研究施設蔵）



御城廻御普請御伺絵図（福岡市博物館蔵）

序

福岡市は、まちづくりの目標の一つに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。いまさら申し上げるまでもなく、本市は地理的關係から、先史時代より東アジアとの文化交流の門戸として発展を遂げてきました。鴻臚館は、この文化交流の代表的な遺跡として学術的に価値が高いとともに、本市の目標とする都市像の原点でもあります。このため、本市では、鴻臚館跡の発見以降、遺跡の全容解明に向けて計画的な発掘調査を行っています。

発掘調査計画に従い、野球場南側地区は平成4年度で終了し、平成5年度からは鴻臚館跡の所在する高台地の西北部における遺跡範囲確認を目的とした第Ⅱ期5ケ年調査を開始いたしました。調査初年度に当たります平成5年度の調査は、調査対象全地域に試掘溝を設定し、遺構や旧地形の確認を行うとともに、第Ⅱ期5ケ年調査計画を円滑に実施するための資料を得ることを目的としたものです。

今回報告いたしますのは、平成5年度に実施いたしました発掘調査の概要です。今後、本書および調査資料が学術研究だけに留まらず、市民各位の文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり御指導と御援助をいただいた鴻臚館跡調査研究指導委員会の委員各位、文化庁の関係者各位、福岡県教育委員会をはじめ種々の御協力いただいた関係各位に対し、深く感謝いたします。

平成7年1月12日

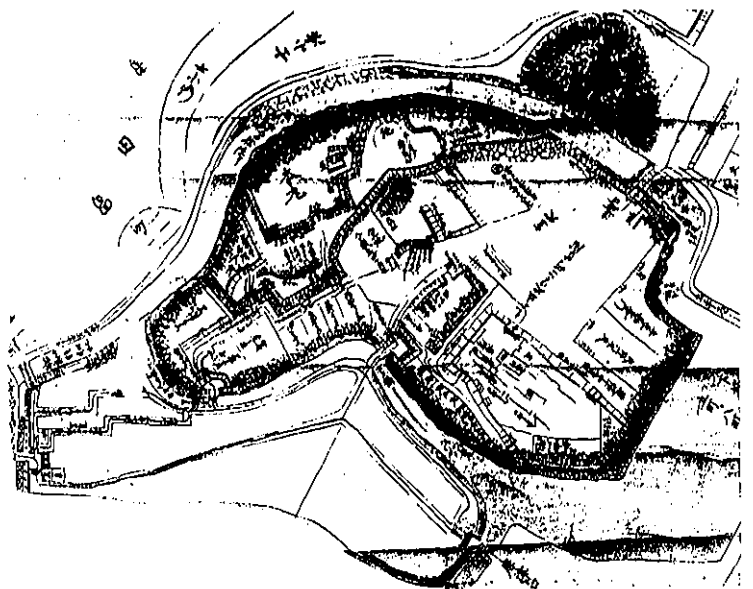
福岡市教育委員会
教育長 尾花 剛

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が、1993年度（平成5年度）に実施した鴻臚館跡発掘調査の概要報告である。
2. 遺構実測図に付した座標値は、平面直角座標系第II座標系による座標値である。高さは全て海拔高で示した。
3. 遺構図には、遺構ごとに一連の遺構番号を付け、番号の前にSA（築地・塀）、SB（建物）、SD（溝・濠）、SE（井戸）、SK（土壌）、SX（その他）などの分類記号を付した。
4. 検出遺構および出土遺物については鴻臚館跡調査研究指導委員の御指導と御教示を得た。
5. 本書に掲載した遺構、遺物の写真は、文化財整備課の田中壽夫、瀧本正志の撮影による。
6. 本書に掲載した遺構、遺物の実測図は、田中、瀧本による。
7. 本書の執筆は、I・IIIを瀧本、IIを田中が担当し、英語訳はLISE J.HODKINSON（九州大学大学院生）が行った。
8. 本書の作成に当たり、宮園登美枝、寺村チカ子、堀一恵、金石邦子、真鍋晶子、大石江里子、岡 毅、西山めぐみ、廣澤亜衣の協力を得た。
9. 本書の編集は、田中と瀧本が担当した。

本文目次

I	はじめに	1
1.	発掘調査計画	1
2.	調査番号の変更	1
3.	遺跡整備計画	1
4.	調査の組織	2
II	調査の記録	5
1.	調査の概要	5
2.	第22次調査	6
(1)	第1トレンチ	6
(2)	第3トレンチ	8
(3)	第4トレンチ	10
(4)	第5トレンチ	12
(5)	第6トレンチ	14
(6)	第7トレンチ	16
(7)	第8トレンチ	18
(8)	第9トレンチ	20
(9)	第10トレンチ	22
III	まとめ	24



筑前国福岡城図（福岡城之古図）〔九州大学九州文化史研究施設蔵〕

挿 図 目 次

Fig. 1	鴻臚館跡発掘調査位置図 (1/5000)	3
Fig. 2	発掘調査区位置図	5
Fig. 3	第1トレンチ遺構平面および断面図 (1/30・1/60)	7
Fig. 4	第3トレンチ出土遺物実測図 (1/3・1/4)	8
Fig. 5	第3トレンチ遺構平面および断面図 (1/60)	9
Fig. 6	第4トレンチ出土遺物実測図 (1/4)	10
Fig. 7	第4トレンチ遺構平面および断面図 (1/60)	11
Fig. 8	第5トレンチ出土遺物実測図 (1/3・1/4)	12
Fig. 9	第5トレンチ遺構平面および断面図 (1/60)	13
Fig. 10	第6トレンチ出土遺物実測図 (1/3・1/4)	14
Fig. 11	第6トレンチ遺構平面および断面図 (1/60)	15
Fig. 12	第7トレンチ出土遺物実測図 (1/3・1/4)	16
Fig. 13	第7トレンチ遺構平面および断面図 (1/60)	17
Fig. 14	第8トレンチ遺構平面および断面図 (1/60)	19
Fig. 15	第9トレンチ出土遺物実測図 (1/3・1/4)	20
Fig. 16	第9トレンチ遺構平面および断面図 (1/60)	21
Fig. 17	第10トレンチ石組遺構 S X 131平面および断面図 (1/40)	22
Fig. 18	第10トレンチ遺構平面および断面図 (1/60)	23

表 目 次

Tab. 1	福岡城城内調査一覧	4
--------	-----------	---

図 版 目 次

巻頭図版 1 調査地周辺航空写真

2 (1) 第1トレンチ第2検出面全景(南から)	
(2) 第1トレンチ第2検出面 S A 06~08(西から)	
3 (1) 第5トレンチ第2検出面南半部(南から)	
(2) 第7トレンチ第5検出面 S P 101~105(南から)	
4 福岡城下之絵図	
5 御城廻御普請御伺絵図	
P L. 1 (1) 発掘調査地全景(西から)	(3) 調査風景(北から)
(2) 発掘調査地全景(北から)	
P L. 2 (1) 第1トレンチ第2検出面 S A 06~08(西から)	(4) 第1トレンチ第2検出面 S A 07(西から)
(2) 第1トレンチ第2検出面全景(南から)	(5) 第1トレンチ第2検出面 S A 08(西から)
(3) 第1トレンチ第2検出面 S A 06(西から)	
P L. 3 (1) 第3トレンチ第3検出面 S X 24(東から)	(3) 第4トレンチ第1検出面全景(東から)
(2) 第3トレンチ第4検出面 S K 25(東から)	
P L. 4 (1) 第5トレンチ第1検出面全景(南から)	(3) 第5トレンチ第2検出面全景(南から)
(2) 第5トレンチ第1検出面 S B 63(東から)	(4) 第5トレンチ第2検出面 S A 65(北から)
P L. 5 (1) 第6トレンチ第1検出面全景(東から)	(3) 第6トレンチ第3検出面西半部(北から)
(2) 第6トレンチ第2検出面西半部(北から)	
P L. 6 (1) 第7トレンチ第1検出面全景(東から)	(3) 第7トレンチ第4検出面北半部(東から)
(2) 第7トレンチ第3検出面北半部(東から)	
P L. 7 (1) 第7トレンチ第5検出面北半部(東から)	(3) 第7トレンチ第5検出面 S P 103礎板(南から)
(2) 第7トレンチ第5検出面 S P 101~105(南から)	(4) 第7トレンチ第5検出面 S P 105礎板(南から)
P L. 8 (1) 第8トレンチ第1検出面全景(東から)	(3) 第9トレンチ第1検出面全景(東から)
(2) 第8トレンチ第2検出面全景(東から)	
P L. 9 (1) 第10トレンチ第1検出面全景(東から)	(3) 第10トレンチ第2検出面石組遺構 S X 131(南から)
(2) 第10トレンチ第2検出面全景(東から)	
P L. 10 トレンチ出土遺物(1)	
P L. 11 トレンチ出土遺物(2)	
P L. 12 (1) 遺跡整備計画図	(3) 遺跡整備状況
(2) 展示館建築状況	

I はじめに

1. 発掘調査計画

鴻臚館跡の調査については、1987年(昭和62年)に平和台野球場改修工事に伴う緊急調査が実施され、以後、野球場南側一帯において発掘調査が継続して行われてきた。しかしながら、長期的調査計画の策定が不十分な状態であったため、改めて調査計画を策定し、平成5年度の鴻臚館跡調査研究指導委員会において審議、了承された。調査計画は、5ケ年を一期とし、これまで実施された野球場南側一帯の調査(1988年～92年)を第Ⅰ期、舞鶴公園西北部一帯(西広場)を第Ⅱ期、二ノ丸、平和台野球場等を第Ⅲ・Ⅳ期とするものである。ただし、委員会では、野球場などの移設時期が早まった場合には、計画に固執せず、柔軟に対応することが強く求められた。さらに、鴻臚館の全容解明には平和台野球場下の調査が必要不可欠であることから、関係部局と調整し、早期に調査が着手できる環境作りを図る旨の指導があった。

第Ⅱ期調査計画においては、鴻臚館跡の所在する高台地の西北部一帯における遺跡範囲確認を主眼点とするものの、調査地が史跡福岡城内に位置することから、江戸時代における当該地域の解明も併せて行うものである。

第Ⅱ期調査計画の初年度に当たる平成5年度の調査は、当該地域においては過去に発掘調査が行われていないことから、調査計画を円滑に実施するための資料を得る必要があった。このため、第Ⅱ期調査対象地域にトレンチを設定し、各時代の遺構の残存状況や旧地形の把握を行うこととした。

2. 調査番号の変更

これまで福岡域内における発掘調査では、二つの遺跡調査名(略号、調査回数)が使用されてきた。鴻臚館跡(KRE)と福岡城跡(FUE)である。この両者の遺跡は範囲に重なりを示しており、整理時に混乱が生じる恐れがあるので、4頁Tab.1に示すように調査番号を変更した。

3. 遺跡整備計画

1988年から調査を実施してきた野球場南側の第Ⅰ期調査区域については、遺跡整備を行うことが平成4年度鴻臚館跡調査研究指導委員会で審議された。平成5年度同委員会において、展示館については建物の建替、館内に原寸大建物模型の設置、館外については三時期の遺構表示を中心とした遺跡整備計画が了承された。さらに、整備に当たっては、平和台野球場下が解明された後に改めて全体的遺跡整備を行う必要性があるので、将来の整備時に役立つように、これまでの整備手法に固執しない積極的な遺跡整備を取り入れる旨の指導があった。

4. 調査の組織

鴻臚館跡調査研究指導委員会（平成4～5年度） ◎ 委員長 ○副委員長

委員名	専門	委員名	専門
◎ 平野 邦雄	国史学	○ 横山 浩一	考古学
石松 好雄	考古学	小田富士雄	考古学
狩 野 久	国史学	川添昭二	国史学
笹山 晴生	国史学	澤 村 仁	建築史
杉本 正美	造園学	鈴木 嘉吉	建築史
坪井 清足	考古学	中 村 一	造園学
西 谷 正	考古学	八 木 充	国史学
渡辺 定夫	都市工学	渡辺 正気	考古学

福岡市教育委員会

平成5年度(1993年度)

教 育 長	尾 花 剛
教 育 次 長	井 上 剛 紀
文 化 財 部 長	後 藤 直
文化財整備課長	古 西 憲 輔
文化財整備課主査	田 中 壽 夫
文化財整備課文化財主事	瀧 本 正 志

平成6年度(1994年度)

教 育 長	尾 花 剛
教 育 次 長	大 森 邦 明
文 化 財 部 長	後 藤 直
文化財整備課長	古 西 憲 輔
文化財整備課主査	田 中 壽 夫
文化財整備課文化財主事	瀧 本 正 志
(資料整理) 整 理 調 査 員	宮 園 登 美 枝

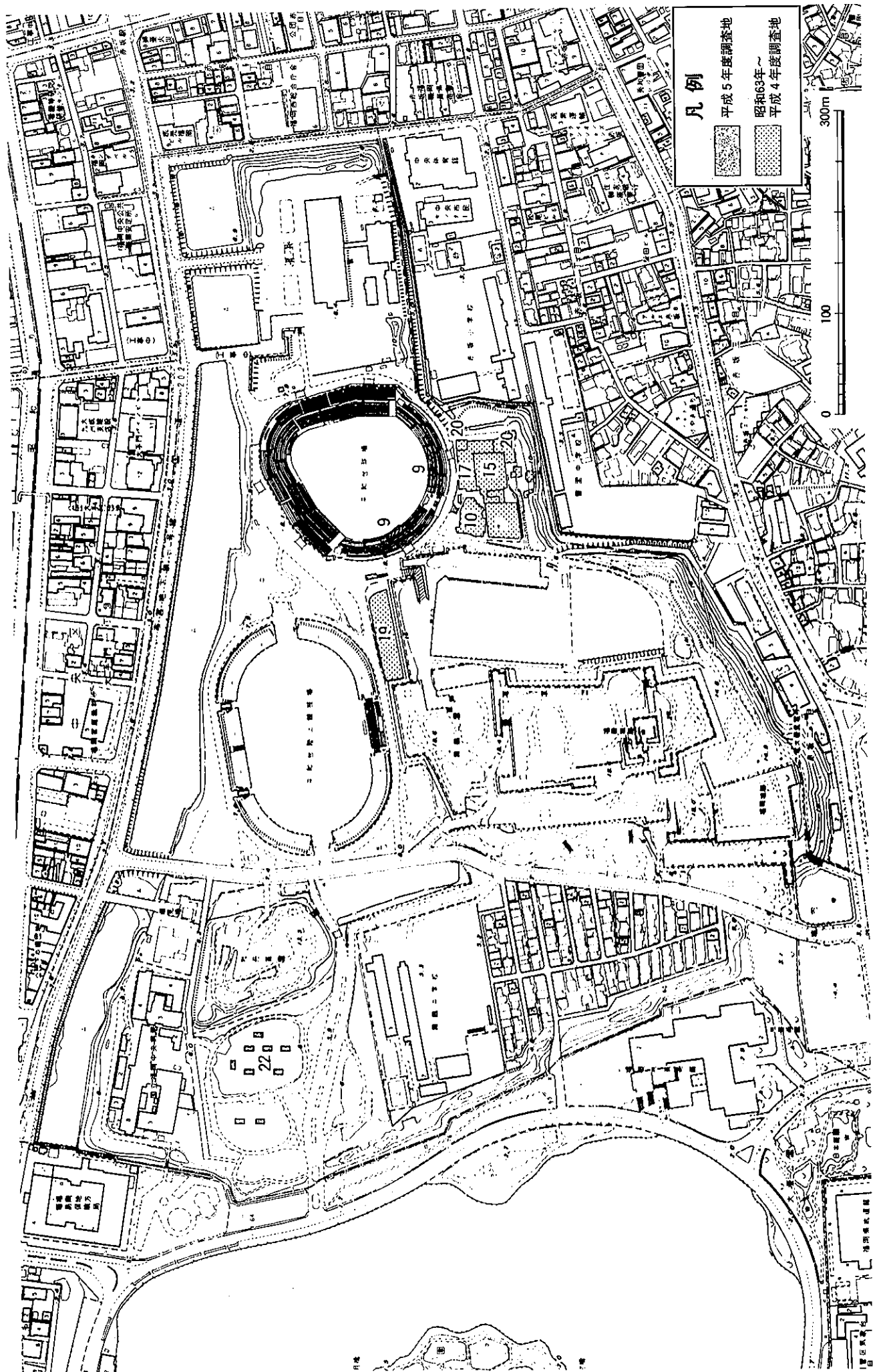


Fig. 1 鴻巣館跡発掘調査位置図 (1/5000)

Tab. 1 福岡城域内調査一覧

調査番号	回数	調査原因	調査面積(㎡)	調査期間	調査担当者	報告書	備考
6301	1	裁判所建設	596	631007~631105 640327~640331	福岡県教育委員会	①	三の丸 鴻臚館2次
7605	2	地下鉄建設	14,900	761201~771008	折尾 学、池崎 誠二 浜石 哲也、山崎 龍雄	②	城堀跡
7728	3	地下鉄建設	500	780301~780630	折尾 学、池崎 誠二	②	城堀跡
7948	4	公園環境整備	2,200	790719~790811	飛高憲雄、力武卓治	③④	御鷹屋敷跡
8134	5	ビル建設	70	820317~820326	田中壽夫	②	城堀跡
8343	6	遺跡環境整備	36	840201~840612	井沢洋一		祈念橋跡
8449	7	公園建設	580	840601~840612	福岡県教育委員会		肥前堀1次
8533	8	市庁舎建設	150	850700~850800	折尾 学、山崎純男	⑤	肥前堀2次
8747	9	平和台野球場改修	650	871225~880120	山崎純男、池崎 誠二、 吉武 学	⑥⑩	鴻臚館3次
8829	10	確認調査	856	880727~881210	山崎純男、吉武 学	⑥	鴻臚館4次
8865	11	公園環境整備	500	880727~881210	山崎純男、吉武 学	⑦	城堀跡
8840	12	ビル建設	650	881107~881126	柳沢一男	⑧	肥前堀3次
8910	13	確認調査	1,155	890420~891207	山崎純男、吉武 学	⑥	鴻臚館5次
8950	14	庁舎建設	180	891011~891021	菅波正人	⑨	肥前堀4次
9005	15	確認調査	1,300	900409~910131	山崎純男、吉武 学	⑥	鴻臚館6次
9065	16	確認調査	190	910301~910331	山崎純男、吉武 学		月見橋跡
9130	17	確認調査	1,000	910501~920331	山崎純男、瀧本正志	⑪	鴻臚館7次
9146	18	確認調査	250	920301~920331	瀧本正志		時橋跡
9218	19	確認調査	1,670	920615~921030	山崎純男、瀧本正志	⑫	鴻臚館8次
9236	20	確認調査	430	920910~930331	山崎純男、瀧本正志	⑫	鴻臚館9次
9262	21	確認調査	100	930301~930331	瀧本正志		花見橋跡
9326	22	確認調査	450	930816~940228	田中壽夫、瀧本正志	本報告	三の丸
9345	23	公園環境整備	220	931213~940228	井沢洋一	⑬	城堀跡
9353	24	公園環境整備	80	931215~931221	田中壽夫、瀧本正志 力武卓治		本丸跡
9363	25	確認調査	61	940301~940328	田中壽夫、瀧本正志		潮見橋跡

報告書一覧

①福岡県教育委員会「史跡福岡城発掘調査概報」1964年

②福岡市教育委員会「福岡城址一内堀外堀石段の調査一福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集 1983年

③福岡市教育委員会「筑前国福岡城三ノ丸 御鷹屋敷」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第59集 1980年

④福岡市教育委員会「筑前国福岡城三ノ丸 御鷹屋敷 図録編」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第59集 1990年

⑤福岡市教育委員会「福岡城肥前堀」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第131集 1986年

⑥福岡市教育委員会「鴻臚館跡Ⅰ 発掘調査概報」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第270集 1991年

⑦福岡市教育委員会「福岡城跡・Ⅳ一内堀内堀の調査一」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第237集 1991年

⑧福岡市教育委員会「福岡城肥前堀第3次調査報告」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第293集 1992年

⑨福岡市教育委員会「福岡城肥前堀第4次調査報告」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第294集 1992年

⑩福岡市教育委員会「鴻臚館跡Ⅱ」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第315集 1992年

⑪福岡市教育委員会「鴻臚館跡Ⅲ」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第355集 1993年

⑫福岡市教育委員会「鴻臚館跡Ⅳ一平成4年度調査概報一」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第372集 1994年

⑬福岡市教育委員会「福岡城跡第23次調査報告」

福岡市埋蔵文化財調査報告書第415集 1995年

II 調査の記録

1. 調査の概要

1) 調査地点の位置

調査地点は、通称舞鶴公園西広場と呼ばれる面積約 18,000m²の公園広場である。

この一画は福岡城三の丸北西側城郭内に位置し、福岡城関連絵図中には「御館」「御下屋敷」と記載されているように、上級武士の屋敷が当初置かれ、後には黒田藩主三代目光之以以降藩主私邸が置かれた地点にあたる。北方約 200mには潮見櫓が位置し、黒田官兵衛（如水）の隠居所と伝えられる御鷹屋敷は東側に隣接する。現況は標高5.4～6.5mの平坦面で、御鷹屋敷との比高差は約 5 mある。築城以前の古代～中世においては、現在の大濠から草香江にかけて湾入した内海に西面した地点にあたる。

2) 試掘溝の概要

試掘溝は、平面直角座標系第 2 座標系に沿って任意に 10 地点設定し、便宜上東から西へ第 1～10 トレンチと呼称した。ただし第 2 トレンチは地下埋設物のため掘り下げていない。各試掘溝の規模は 5×10m の長方形である。調査にあたっては、遺構の遺存状況や、土層の堆積状況等を考慮しながら、各トレンチ毎に人為的に 2～5 面の検出面に分け調査を実施した。いずれのトレンチにおいても、近～現代の攪乱のために遺構の遺存状況は良くないが、福岡城築城時期の大規模な盛土整地の状況と、屋敷地関係の土堀や溝、柱穴等の遺構を確認することができた。明確な時期比定と屋敷地の構成等については明らかにできなかったが、福岡城関連遺構が比較的良好に遺存していることが確認できたことは、今後の福岡城の史跡整備と調査にとって大きな成果である。また鴻臚館跡に直接関連する遺構は今回の調査では認められなかったが、奈良から平安時代の遺物が散見できることから、今後の調査が期待された。

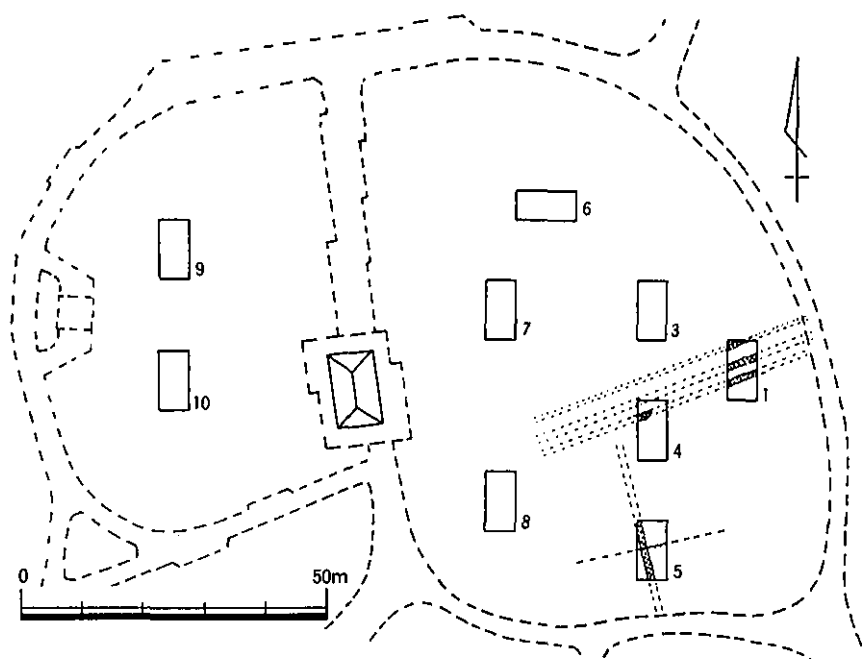


Fig. 2 発掘調査区位置図(数字はトレンチ番号)

2. 第22次調査

(1) 第1トレンチ

1) 位置 (Fig. 2)

第1トレンチは、最も東端に位置し、御鷹屋敷が占地する高台との比高差は約5mを測る。このトレンチでは高台丘陵裾部における遺構のあり方が注意された。

2) 土層堆積状況と検出面 (Fig. 3、PL, 2)

本地点では明治期～昭和40年代までの整地層や攪乱が顕著である。1～4層までは昭和後半期以降の盛土整地層、廃棄土壌である。標高約5mの面に褐色～暗褐色砂層(第15層)が分布しておりその下面に青灰色粘土と黄褐色粘土による整地面がある(第16層)。この面を第1検出面とした。さらにこの層の下には層厚10～15cmの石英砂を主とする青灰白色砂層(18層)がほぼ水平に分布している。18層下部の標高は4.7m前後である。この整地層は他のトレンチでも約10cm前後の高低差をもってほぼ同レベルで広く分布していることが確認されている。福岡城築城時期に近い17世紀代の人為的な盛土整地面と考えられる。第2検出面は、18層が覆う標高約4.5～4.6mを測る地山(第3紀頁岩)面である。この面は、人為的な平坦面であり、西側の各トレンチではほぼ同レベルで風化頁岩を主体とする盛土整地面が続いている。城郭北西部における大規模な盛土整地の基準面と考えられよう。

3) 遺構と遺物 (Fig. 3、PL, 2)

第1検出面では若干の柱穴と土塀がある。遺物は瓦片が出土している。第2検出面では柱穴2および土塀等の基礎部分と考えられる配石遺構を3条検出した。

配石遺構はほぼ並行しながら東西に延びており、第5トレンチでSA05・06の一部を確認している。なお主軸方向はいずれも $N-68^{\circ}30' \sim 69^{\circ}-E$ で、主軸間の距離は、SA06とSA07間が2.26mで、SA07とSA08間が3.21mである。

SA06は幅0.7mで、長さ4.2mにわたって検出した。中央部は遺存状況が悪い。基底部は地山を若干掘りこみ、南北両縁に15～20cm大の角礫を小口を揃えながら据えている。石積みの状況は不明である。両縁間は不定形の小礫片、砂質土を充填している。角礫は主として頁岩で、一部玄武岩を用いている。

SA07は幅0.98～1.0mで、長さ4.5mにわたって検出した。北東部が現代攪乱により破壊されている。南北両縁および両縁間の構築方法はSA06と同様であるが、使用している石材が一回り大きな角礫である。石材もまた共通している。

SA08は調査区北西隅にかかっており、幅0.7m、長さ3.3m分を検出した。前二者と同様な構造であるが、規模が小さく、用いている石材もまた小振りである。

以上の配石遺構の先後関係は不明確であるが、わずかな時期差を持って、第18層によって整地されるまでの間に順次構築されたものである。これらの配石遺構は、築城後間もない時期の屋敷地を画する塀であったと考えられる。

遺物は、各整地層から中世の中国産白磁片、伊万里系染付片、瓦片が二次的な堆積で若干出土している。

第1トレンチ土層所見

- | | |
|---------------------------|---------------------------------------|
| 1. 表土(真砂盛土) | 14. 暗褐色・灰褐色・
黄褐色粘質土の互層 |
| 2. 盛土 | 15. 暗褐色砂質土層
(粗砂を多く含む) |
| 3. 盛土 | 16. 黄褐色・灰色・黄白色粘土層
(上面鉄分沈着) |
| 4. 暗灰色瓦礫層(昭和後期整地層) | 17. 灰色粘土層、風化礫を多く混入 |
| 5. 暗灰色瓦礫層 | 18. 灰色～灰白色粗砂層(固くしまる) |
| 6. 暗灰色土層 | 19. 灰色～暗灰色シルト層
(微砂層、調査区北側には木炭片が分布) |
| 7. 暗灰～黒灰色粘質土層 | 20. 暗灰色細砂層 |
| 8. 暗灰色粘質土、
黄灰色・褐色粘土混合土 | 21. 灰色粘土層 |
| 9. 灰褐色土層 | 22. 赤褐色・黄褐色・灰緑色粘土、風化礫層 |
| 10. 茶灰色砂質土層 | 23. 第3紀風化頁岩(地山) |
| 11. 灰色～暗灰色砂質土層 | |
| 12. 褐色・茶灰色・
黄白色粘質土混合土層 | |
| 13. 暗褐色～灰褐色粘質土層 | |

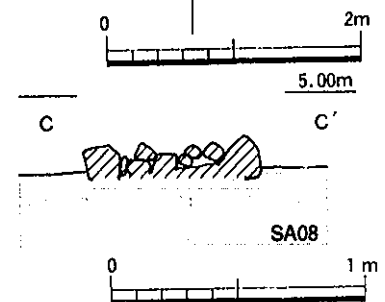
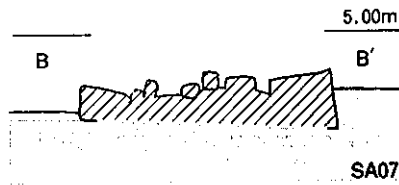
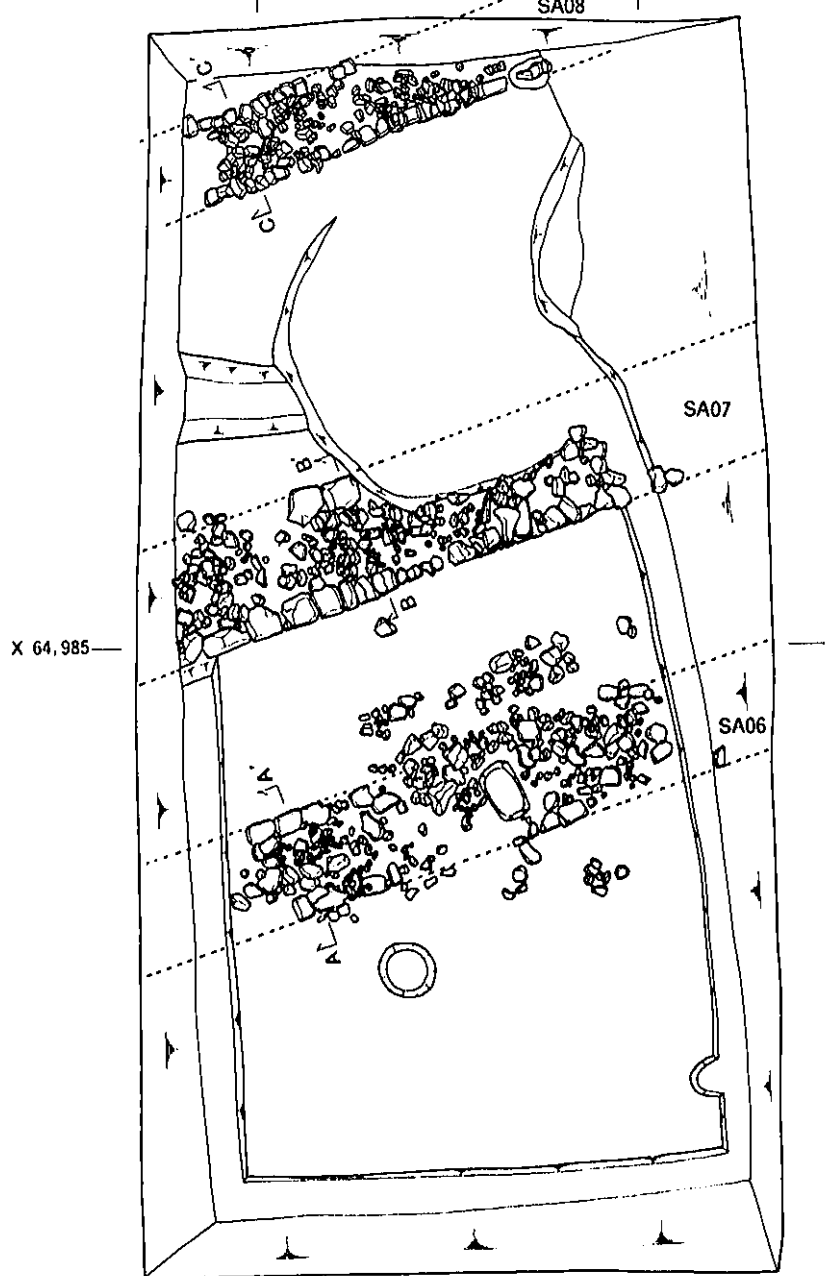
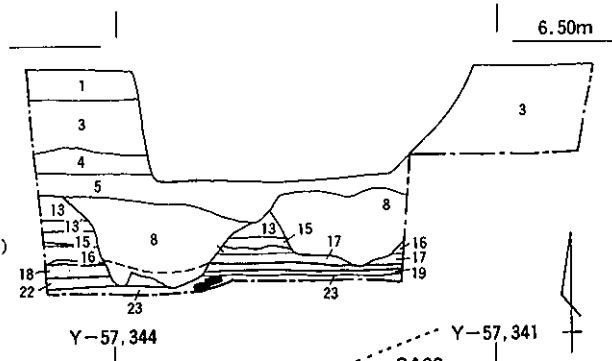
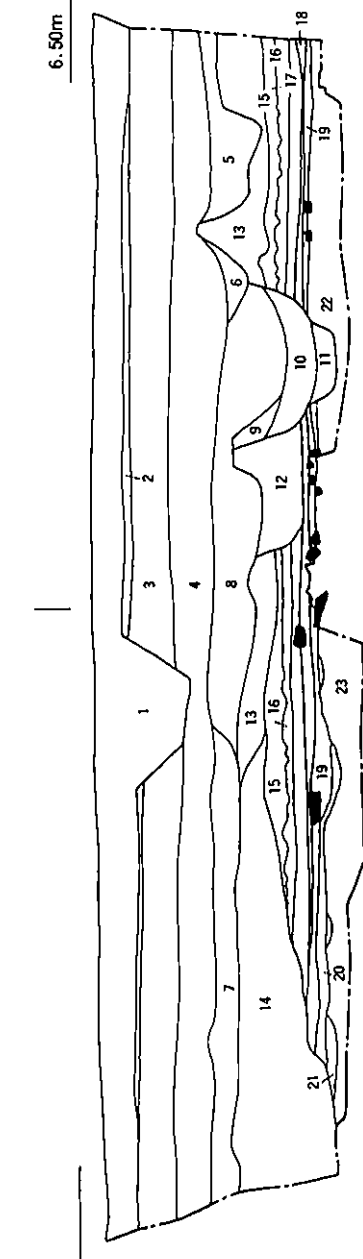


Fig. 3 第1トレンチ遺構平面および断面図(1/30・1/60)

(2) 第3トレンチ

1) 位 置 (Fig. 2)

本トレンチは、第1トレンチ西北端から10m離れた北西側に位置する。この地点では第1トレンチ土塀基礎SA06～08に関連する遺構の有無と層位的確認が調査の主目的である。

2) 土層堆積状況と検出面 (Fig. 5、PL. 3)

トレンチ中央から北半分は昭和40年代の家屋廃材廃棄土壌のため地山面まで破壊されている。1～4層は近代～昭和後半期以降の盛土層。標高4.8～5.0mに暗灰色～黒灰色砂層が厚く分布しておりその下面に褐色～黄褐色粘土整地層（第11層）がある。この上面を第1検出面とした。この下部に第1トレンチの第18層に相当する第12～13層を挟んで盛土整地面（第15層）がある。この層上面を第2検出面とした。標高は4.7～4.8m前後である。この第15層を除去した面を第3検出面とした。標高は4.6m前後である。さらにこの下部において、標高4.5mの面を第4検出面とし、トレンチ南壁にかかる土壌（SK25）を検出した。地山は北東部では標高4.2m前後の面以下にみられる。

3) 遺構と遺物 (Fig. 4・5、PL. 3・10)

第1検出面では土塀3基、溝6条、柱穴等を検出したがいずれも上層からの掘り込みによるもので近代～現代のものである。第2検出面では柱穴1のみである。この面は足跡と思われる凹凸が南東部にみられた。

SX24は、暗青灰色～黒灰色混砂粘質土を埋土とし瓦礫を多く含む不定形の浅い土塀である。近世瓦片、染付、土師器片が出土している。1は土師器皿である。糸切り底。口径7.2cm、器高1.5cm、底径5.8cm。2は肥前系瓶底部片で回転糸切り底である。底径3.8cm。釉薬は透明な灰色。4は唐津系鉢で、復元口径27cm。口縁は体部途中から大きく外反する。釉薬は淡褐色で体部下半は露胎である。SK25は平面形が不定形の土塀で、長軸が5.5m、短軸が3.4m、検出面からの深さ1.2m前後を測る。図示したのは、上層での瓦片、礫群の出土状況である。埋土中層には、植物遺体、木炭、板材等を含む層がみられる。廃棄用の土塀か。3は唐津系皿の高台片である。見込み内底には鉄釉による施文がある。高台部周辺は露胎。5は備前焼播鉢口縁部片。6は軒平瓦片である。復元幅は約24cm。中心飾は花文で、2回転の唐草を中心飾下部から派生させている。

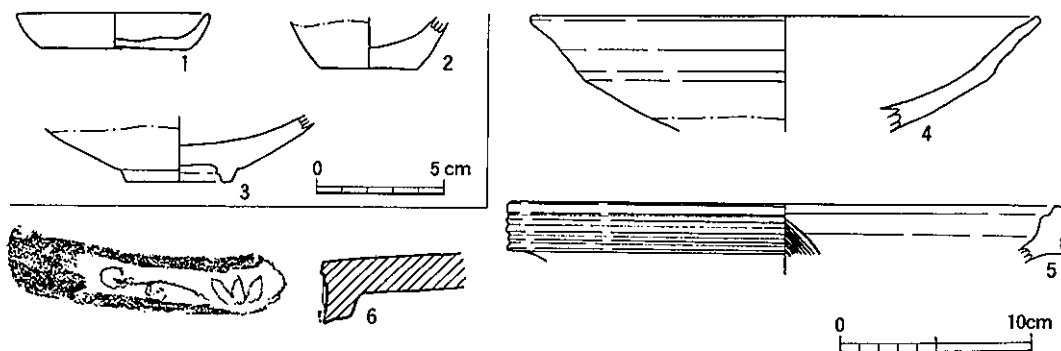


Fig. 4 第3トレンチ出土遺物実測図(1/3・1/4)

第3トレンチ土層所見

- | | |
|---------------------------------|--------------------------------|
| 1. 表土(真砂盛土) | 13. 褐色砂質粘土層
(風化礫、粘土を含む) |
| 2. 盛土 | 14. 淡灰黄色粗砂層 |
| 3. 盛土 | 15. 暗褐色砂質土層 |
| 4. 暗灰色瓦礫層
(昭和後期整地層) | 16. 灰色砂、黄灰色砂混合土
(鉄分・マンガン沈殿) |
| 5. 暗灰～黒灰色砂質土層 | 17. 灰～淡黄灰色粗砂層 |
| 6. 灰褐色砂質土層 | 18. 黄灰色・灰色粘土、砂の混合土 |
| 7. 暗灰褐色砂質土層 | 19. 暗灰色泥砂粘質土(砂礫含む) |
| 8. 灰褐色砂質土・黒褐色土混合層
(風化頁岩片を含む) | 20. 暗灰褐色砂質土層 |
| 9. 灰褐色砂層 | 21. 灰色粘土、黄橙色風化土混合土 |
| 10. 灰褐色砂質土層 | 22. 灰色粘土層(粘土、砂の混合層) |
| 11. 褐色粘質土層 | 23. 灰色粘土層 |
| 12. 灰褐色砂層 | 24. 灰色粘土層 |

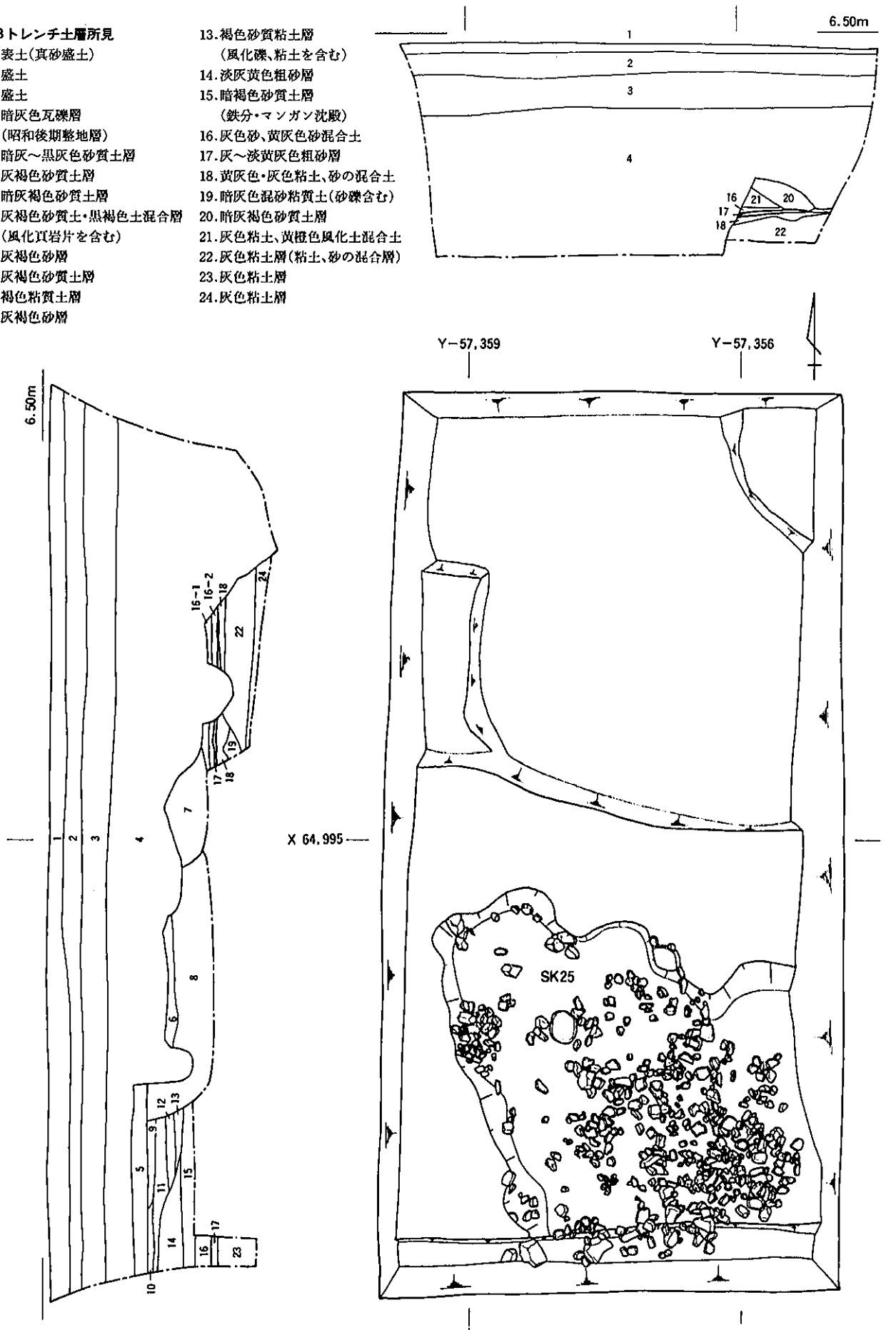
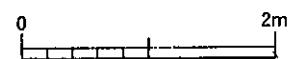


Fig. 5 第3トレンチ遺構平面および断面図(1/60)



(3) 第4トレンチ

1) 位 置 (Fig. 2)

本トレンチは第1トレンチの西南部に位置する。この地点では第1トレンチSA06～08の延長部の確認とそれを覆う青灰白色砂質土整地層の分布状況の把握が主目的である。

2) 土層堆積状況と検出面 (Fig. 7、PL. 3)

土層堆積は中央部に現代の廃棄土壌がある他は比較的プライマリーな状況である。第1～8層までは現代の整地層である。当地点では検出面は1面だけである。第1検出面は当トレンチでは第43層と44層上面で設定した。第1トレンチと同様その表面は凹凸が顕著で、鉄分沈着がみられる。中央部から南側では、第32～38層のような乱堆積を示す盛土が堆積している。江戸期の水平に堆積する整地層(29～49層)は認められず、包含する遺物等からみて近世～近代における新規の整地土と思われる。第18、23層を埋土とする近代の溝SD32・33はこれらの整地土を掘削している。なお、角礫群(SA41)が、第1検出面から-30cmの面で確認できた。西壁第47層下部に位置する。

3) 遺構と遺物 (Fig. 6・7、PL. 3・10)

第1検出面では溝4条(SD27・32・33・38)、土塋4基(SK26・28・31・34・37)、柱穴4がある。これらの先後関係はSD32・33・38→SK28・SK34→SK31、SD32・33・38→SK37→SD27→SK26である。SK26・31・37、SD27は現代の所産である。他はいずれも近世から近代にかかる時期のものと思われる。西壁において第1検出面から-30cmのレベルで検出したSA41は層位的にみてSD32・33・38よりも古い礫群である。地山は標高4.17mのレベル面で確認した。SD32・33・38は幅が0.85～0.95m、深さ0.70mの溝である。断面形は逆台形で、埋土は均一な黒灰色～黒褐色砂質土である。各溝はほぼ並行しており、主軸方向はN-11°30'-Wである。平面形および断面形、掘削深度、埋土等が共通していることから同時期に掘削された溝と思われる。SK28はトレンチ中央に位置する円形の土塋である。径1.1m、深さ0.50m。SK34は西壁側中央に位置する不定形の土塋である。長軸2.4m、短軸1.3m、深さ0.45m。底部は矩形で断面形は逆台形を呈している。7は軒平瓦である。幅は25.6cm前後に復元できる。中心飾は三葉文で二回転の唐草文を中心飾の上位から派生させている。焼成良好で、一部銀灰色を呈する。SA41は西壁第48層下部で検出した。この層は第1トレンチ第18層に相当する。検出高は標高4.7mで、SA06とほぼ同レベルである。層位および位置関係からみてSA06の延長部分と考えられる。

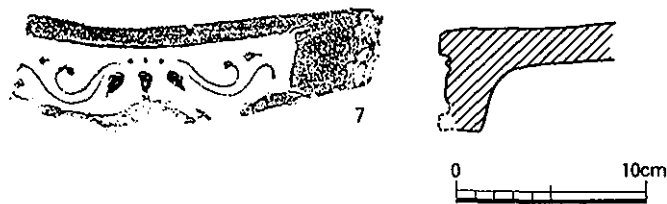


Fig. 6 第4トレンチ出土遺物実測図(1/4)

第4トレンチ土層所見

- | | |
|------------------------------|--------------------------------|
| 1. 表土(黄砂盛土) | 27. 灰褐色砂質土 |
| 2. 盛土 | 28. 黒灰色粘質土層(風化礫を含む) |
| 3. 盛土 | 29. 灰褐～暗褐色砂質土層
(黄白色風化頁岩を含む) |
| 4. 暗褐色粘質土層 | 30. 褐色砂質土層 |
| 5. 褐色粘質土層
(黄白色・赤褐色粘土塊を含む) | 31. 黒褐色粘質土層 |
| 6. 暗褐色粘質土層 | 32. 黒灰色砂質土層(黄白色粘土を含む) |
| 7. 褐色粘質土層 | 33. 灰褐色砂質土層(褐～褐色粘土小塊) |
| 8. 黒暗灰色砂質土層 | 34. 黒色粘質土層 |
| 9. 暗灰色砂質土層 | 35. 灰色砂層(黄灰色頁岩を多く含む) |
| 10. 暗灰色砂質土層 | 36. 暗褐～黒褐色砂質土層 |
| 11. 黒褐色砂質土層 | 37. 灰褐色砂質土層 |
| 12. 黒灰色粘質土層 | 38. 暗灰色砂質土層(小礫を多く含む) |
| 13. 黒灰色土層 | 39. 暗灰色細砂質土層 |
| 14. 灰褐色砂質土層 | 40. 黄灰色砂層 |
| 15. 灰褐～暗灰色砂質土層 | 41. 褐色砂層 |
| 16. 暗灰色砂質土層 | 42. 灰褐色砂質土層 |
| 17. 黒褐色砂質土層 | 43. 灰色細砂層 |
| 18. 灰色砂質土層 | 44. 褐色土層
(灰色粘土・褐色砂質土を含む) |
| 19. 暗褐色砂質土層 | 45. 灰白色・黄褐色粘土・砂混合土層 |
| 20. 褐色粘質土層 | 46. 青灰色細砂層 |
| 21. 灰褐色砂質土層 | 47. 灰白～青灰色砂層 |
| 22. 黒褐色砂質土層 | 48. 黄褐色粘土整地層 |
| 23. 褐色砂質土層(木炭片を含む) | 49・51. 風化頁岩礫層 |
| 24. 灰褐色砂質土層 | 50. 黄灰色粘質土層 |
| 25. 灰褐～暗褐色砂質土層 | 52. 第3紀頁岩(地山) |
| 26. 灰褐色砂質土層 | |

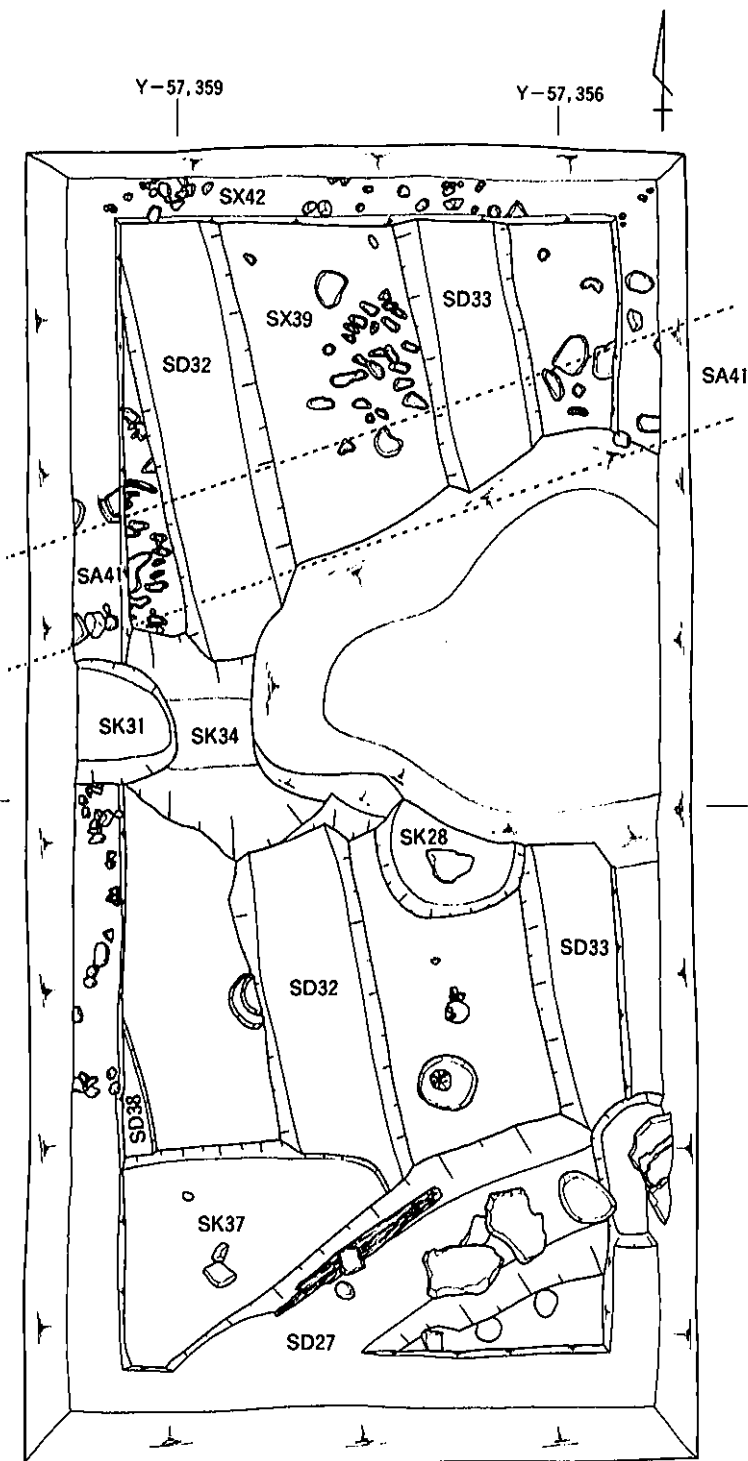
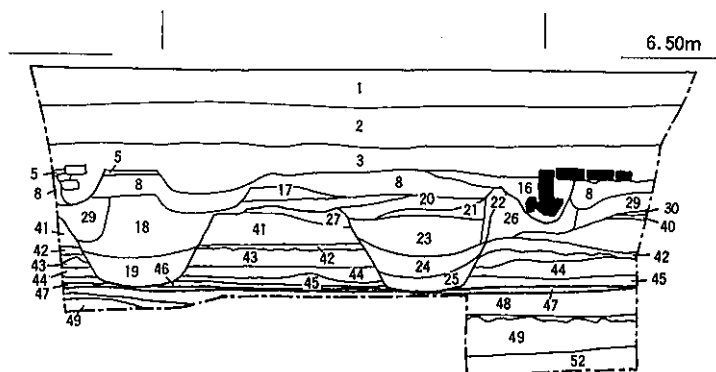
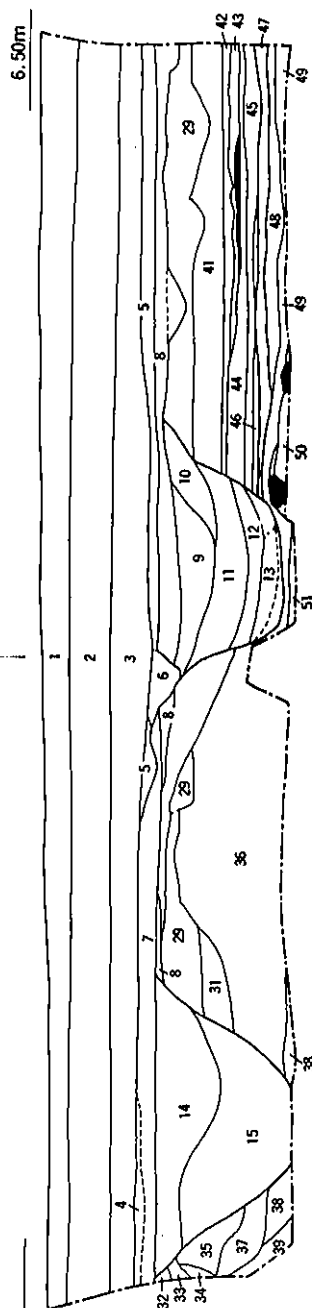


Fig. 7 第4トレンチ遺構平面および断面図(1/60)

(4) 第5トレンチ

1) 位 置 (Fig, 2)

第4トレンチの南側に位置する。このトレンチでは第4トレンチで検出した整地層(第36層等)の分布状況と近代の溝SD32・33の延長部、江戸期の整地層の遺存状況の確認が調査の主目的となった。

2) 土層堆積状況と検出面 (Fig, 9、PL, 4)

この地点では攪乱は比較的少ない。第1～7層は現代の盛土である。標高5m前後の面(北壁第49層下部)を遺構検出面とした。北壁周辺においては第1～4トレンチ北側で確認した暗褐色砂層、その下部の青灰色粘質土および青灰色砂層が水平に堆積しているが(第46～50層)、SD46南壁から南側にかけては第25～42層のような乱堆積の状況である。これらの土層は建物SB63の基壇内盛土、土壌SK06等の埋土などであり、第4～5トレンチ周辺が後世の改変を比較的多く受けたことを物語っている。なお地山面は確認していない。整地層は地山面までかなり厚いものと思われる。

3) 遺構と遺物 (Fig, 8・9、PL, 4・10)

本トレンチで検出した遺構は、塀1条(SA65)、建物基壇(SB63)、溝3条(SD46・47・62)、井戸1基(SE44)、土壌7基(SK45・48・51・55など)、柱穴である。これらの先後関係は、SA65→SB63→SD46・SD47、SB63→SK48、SD62→SE44→SK51、SD62→SK45である。

SA65は江戸期のもので、SB63およびSD62は明治期以降、SD46、SE44、SK45・48・51・55は昭和初期以降のものである。

SA65は第1トレンチSA06～08に類似する配石遺構である。幅は0.95m、長さ9.8mにわたって検出した。主軸方向はN-12°30'-Wを測る。SD46やSK55によって一部壊されている。基底部は整地層第50層を若干掘りこみ、南北両縁に15～30cm大の角礫を小口を揃えながら据えている。両縁間は小礫片、砂質土を充填している。角礫は頁岩、玄武岩を用いている。SA06～08との交叉角度は100度である。

SB63は建物基壇と考えられる。基壇縁石は40～50cmほどの玄武岩、片岩等を用いている。東壁断面での盛土の状況を見ると、基壇高は約60cmの高さがあったと思われる。基壇上面は標高5.3mである。SD62はSB63とは一連の溝で、建物を画すとともに配水も兼ねたと思われる。溝の内法は20cmで、15cm前後の角礫を面を揃えて据えている。

遺物は、近世瓦や陶磁器片が出土しているが図示できるものは少ない。

8は肥前系染付碗である。外面には網目文を施文。高台径4.2cm。9は染付皿である。内面見込みは輪状に釉薬を掻き取っている。高台疊付には砂目跡が付着(SE44出土)。10は耳付土鍋片である。復元口径22.4cm。外面はハケ目内面はナデ仕上げ。

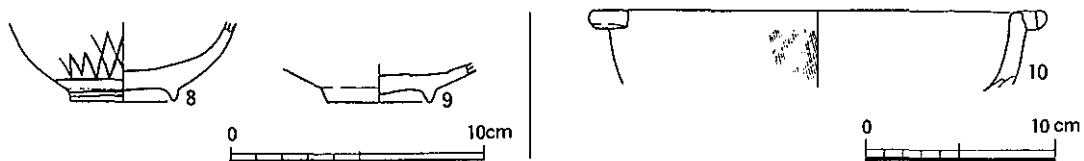


Fig. 8 第5トレンチ出土遺物実測図(1/3・1/4)

第5トレンチ土層所見

1. 表土(黄砂盛土)
2. 盛土
3. 盛土
4. 旧表土層
5. 赤色レンガ埋土
6. 黒灰色砂質土層
7. 暗褐～黒褐色砂質土層
8. 黒灰色～黒灰褐色砂質土層
9. 暗褐～黒褐色砂質土層
10. 黒褐色～黒灰褐色粘質土層
11. 黒灰色～黒褐色砂質土層(菜きょう出土)
12. 黒色粘質土層(木片・腐食土)
13. 暗褐色砂質土層
14. 暗褐色粘質土層
15. 暗褐色粘土層
16. 黒褐色～黒灰褐色砂質土層(瓦礫を含む)
17. 黒褐色砂質土層
18. 暗灰褐色砂質土層
19. 暗褐色砂質土層(粗砂を多く含む)
20. 暗褐色砂質土層(上面に鉄分沈着)
21. 明黄灰色砂質土層(風化礫・瓦・砂混合)
22. 明褐色砂質土層
23. 明褐色砂質土層(風化礫)
24. 黄灰色砂質土層(砂・風化礫)
25. 明褐～暗褐色砂質土層
26. 黒褐～暗褐色砂質土層(木炭・礫)
27. 暗灰～黒灰色粘土層
28. 灰褐色砂質土層
29. 黄褐～赤褐色粘土層
30. 黄褐色粘質土層
31. 暗褐色粘土層
32. 暗灰褐～灰黄色砂質土層
33. 淡茶灰色砂質土層(粗砂・木炭・瓦片)
34. 暗黄灰色砂質土層(風化礫)
35. 黄赤褐色粘質土層(風化礫を含む)
36. 暗褐色砂質土層(鉄分沈着)
37. 暗黄灰～暗茶灰色砂質土層
38. 淡黄灰色砂質土層
39. 30と同一層
40. 黄灰～茶灰色砂質土層
41. 暗茶灰色砂質土層(木炭片)
42. 明茶灰色砂質土層(整地層か)
43. 茶灰色砂質土・黄白色粘土混合土層
44. 暗灰～暗黄灰色砂質土層(頁岩小礫)
45. 黒灰～黒褐色砂質土層(頁岩小礫)
46. 暗褐～褐色砂質土層
47. 灰～灰褐色砂質土層
48. 褐色砂質土層(粗砂・小礫を含む)
49. 頁岩・褐色砂質土混合整地層
50. 暗灰褐色砂質土層(整地層)

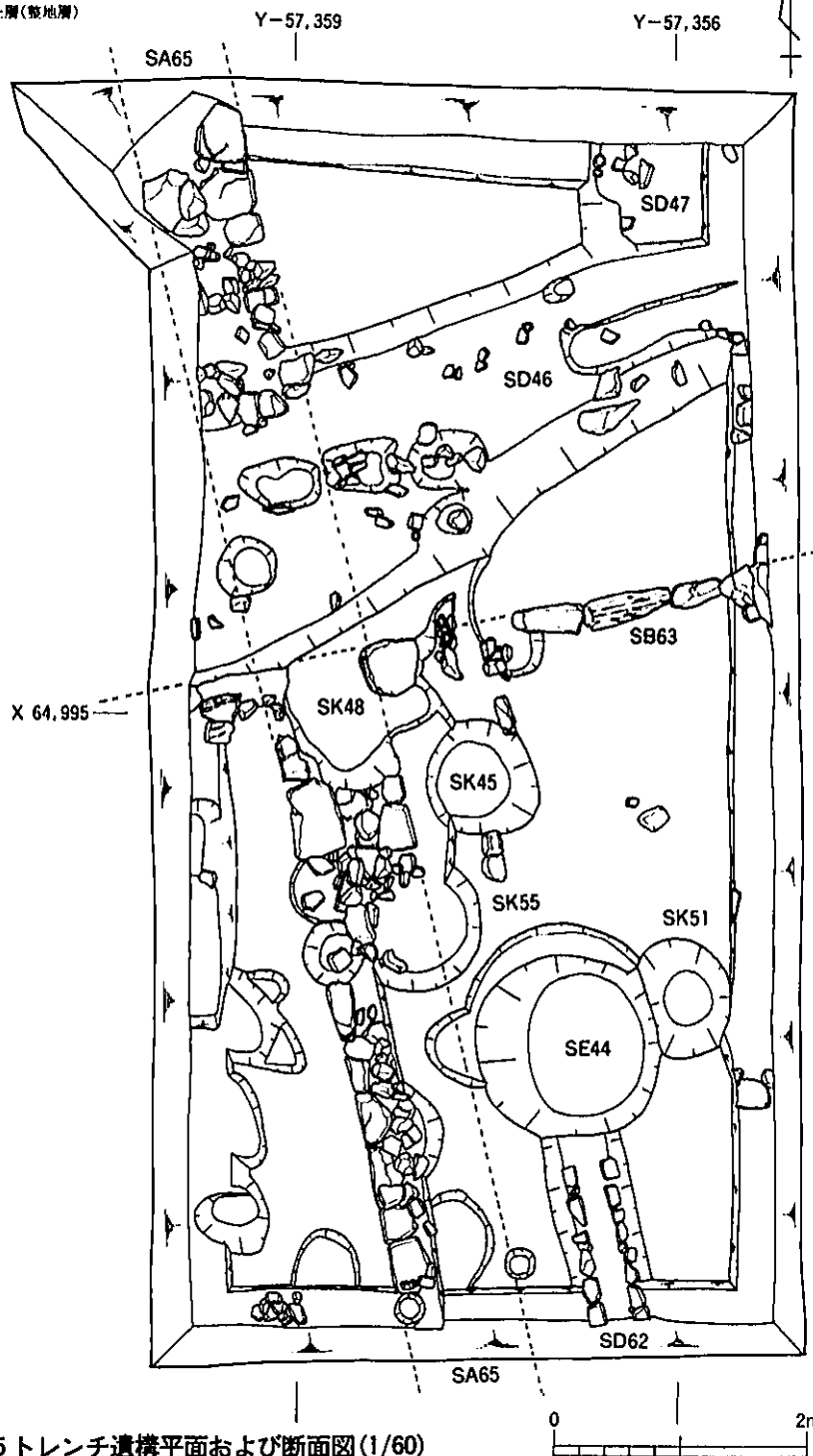
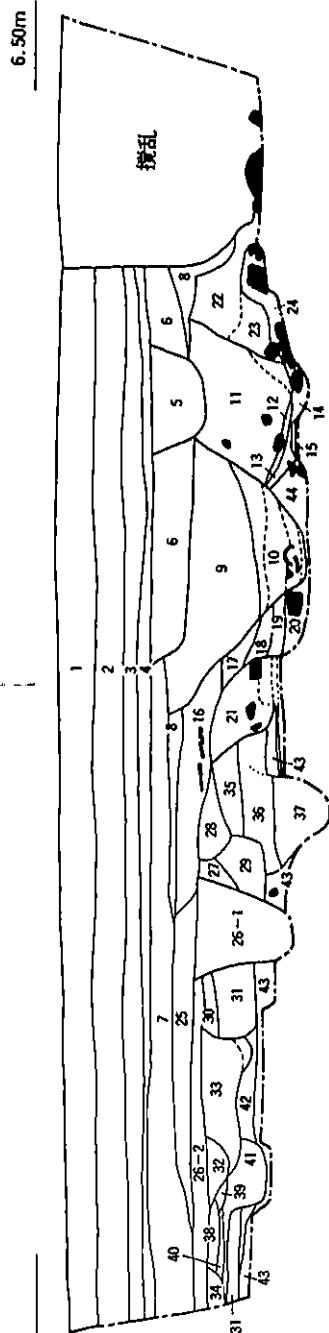


Fig. 9 第5トレンチ遺構平面および断面図(1/60)

(5) 第6トレンチ

1) 位置 (Fig. 2)

本トレンチは最も北側に位置している。東西に主軸を取り設定した。この地点では第1トレンチSA06~08を覆う青灰白色砂層の有無、第5トレンチSA65の延長部と層位的位置づけが調査の主目的である。

2) 土層堆積状況と検出面 (Fig. 11、PL. 5)

この地点では昭和40年代の家屋廃材の廃棄土壌による攪乱が顕著で、中央部から東側にかけては現地表から-2.7m以上の深さまで掘削されている。検出面は標高4.8m前後の面を第1検出面(第7層上面)、4.7mの面を第2検出面(11~13層上面)、4.5mの面を第3検出面(第16~18層上面)とした。11~13層は第1トレンチでの第47層に相当する整地層である。この層の下部に配石遺構が検出した。この地点では地山は確認していない。

3) 遺構と遺物 (Fig. 10・11、PL. 5・10)

第1検出面では土塼1基(SK66)、溝4条(SD68・69・70・71)がある。遺構の先後関係は、SK66→SD68・70・71→SD69である。いずれも近世~近代にかかる時期のものである。

SK66は平面形が直径3.7mの円形で、深さ約30cmの廃棄用土塼である。

SD68・70・71は幅1m前後で、断面が逆台形の溝である。各溝はほぼ並行しており、主軸方向はN-12°-Wである。第4トレンチのSD32・33・38と同時期の溝と思われる。

第2検出面では遺構は確認されていない。整地層が面的に良好に残っている。

第3検出面のSA73は塀の基礎となる配石遺構である。破壊されており形状等は不明。

11は唐津系皿。内面施文は刷毛目手。口縁~外面は露胎。12~14はいずれも糸切り底の土師器小皿と杯である(第16層出土)。口径・器高・底径は12が9.4・7.6・1.6cm、13が9.8・1.9・7.0cm、14が16.0・2.3・10.5cm。15は肥前系小壺。油壺か。16は玉縁口縁の白磁碗底部片。17は唐津系高台付き皿。口縁径17.6cm。外面下半は露胎。18は軒平瓦。中心飾は菱文。焼成あまく軟質。19は軒平瓦。復元径は15.2cm。三巴文の尾は圈線上で接している。珠文は12個か。焼きはあまく灰白色を呈する。

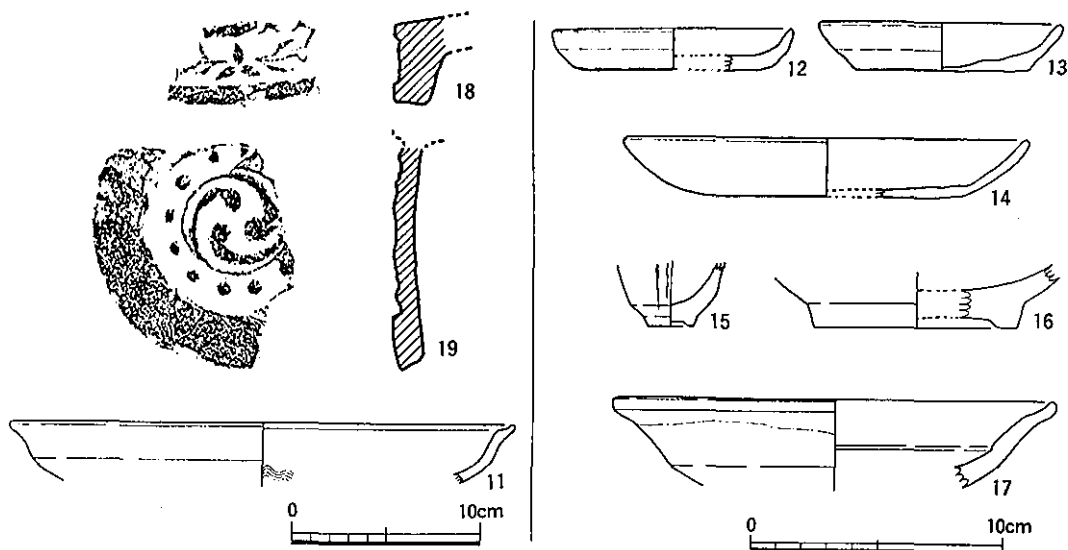
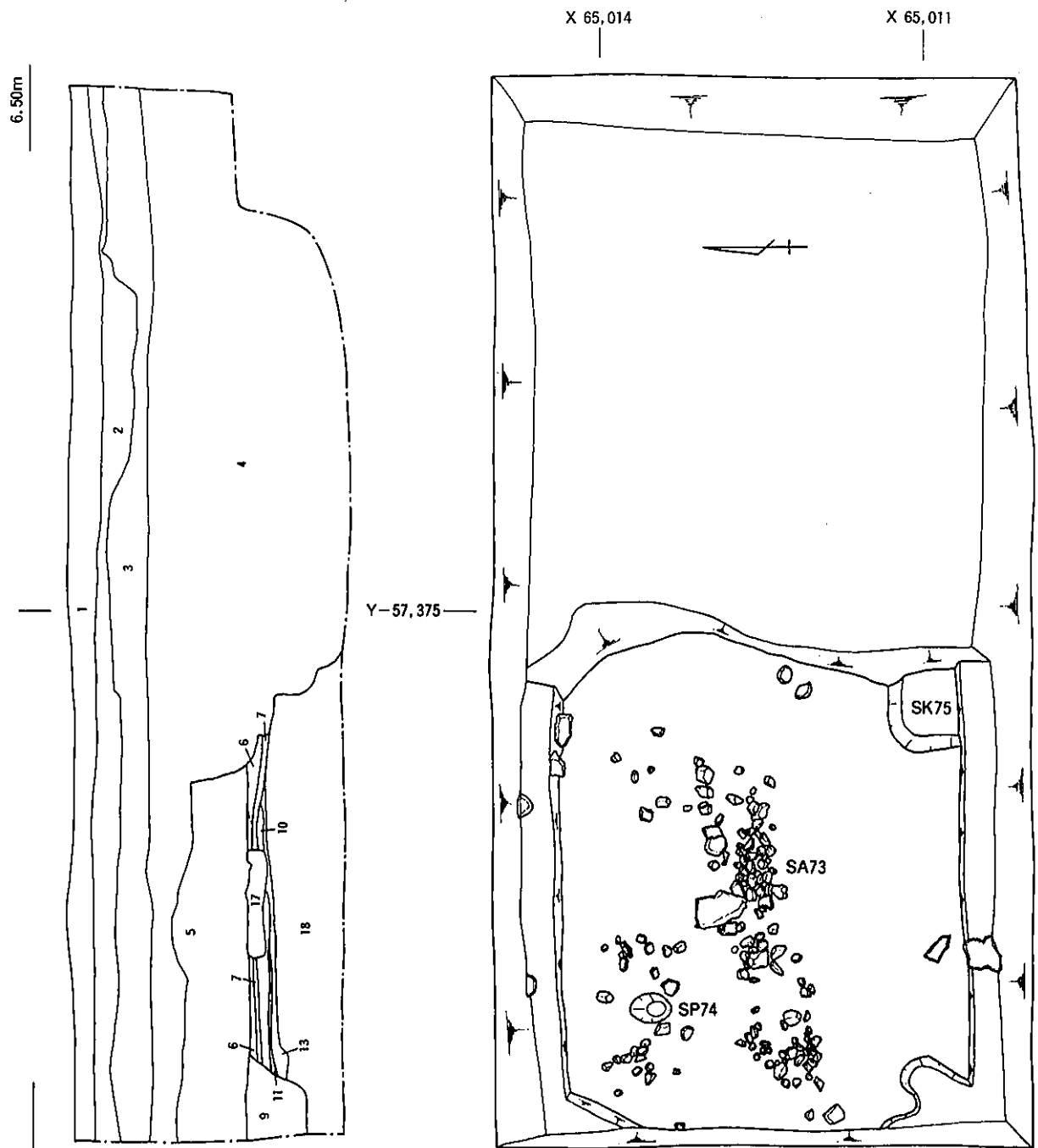


Fig. 10 第6トレンチ出土遺物実測図(1/3・1/4)



第6トレンチ土層所見

1. 表土(真砂盛土)
2. 盛土
3. 盛土
4. 暗灰色砂質粘質土層(礫・コンクリートを含む。攪乱域)
5. 黒灰色砂質土層(瓦片・風化礫・粘土・小礫を多く含む)
6. 暗灰色砂層(ややきめ粗い)
7. 灰色砂層(上部に鉄分沈着)
8. 暗灰色砂層(木炭片を若干含む)
9. 黒灰色砂質土層(褐色粘質土・木片・木炭片・小礫を多く含む)
10. 灰～暗灰色砂質粘土層(上部はやや明るい灰色で、鉄分が沈着)
11. 灰色砂層(薄く鉄分が沈着)
12. 暗灰色(粘土・小礫・砂)混合土(瓦片含む)
13. 灰色砂質粘土・黄白色粘土・風化礫の混合土(鉄分が沈着)
14. 褐色砂層(細礫を含む)
15. 灰褐色粗砂層
16. 明灰白色粘土～シルト層(小礫を若干含み、よくしまる)
17. 明褐色粘土ブロック
18. 明赤褐色・灰色・暗灰色粘土の混合土(頁岩を多量に含む、整地層)

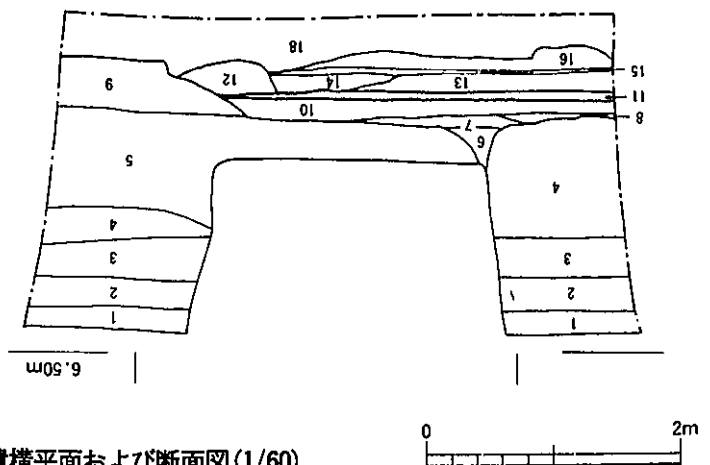


Fig.11 第6トレンチ遺構平面および断面図(1/60)

(6) 第7トレンチ

1) 位置 (Fig. 2)

本トレンチは第II期調査区中央部付近に位置している。この地点では、第1トレンチの整地層第47層の分布とその下部の風化頁岩盛土層の厚さの確認が調査の主目的である。

2) 土層堆積状況と検出面 (Fig. 13、PL, 6・7)

南側は昭和40年代の廃棄土壌により一部破壊されている。第1～6層は現代の攪乱または整地層である。第7～13層は近代以降の滞、土壌または盛土である。検出面は5面設定した。第1検出面は標高 5.1mの面で、北壁第17層上面に相当する。近代以降の盛土面で、この層は第4～6・8トレンチでもみられた。第2検出面はこの第17層を除去した面である。第3検出面は第1・3トレンチでの第1検出面に相当する青灰～灰褐色粘質土層上面である。第4検出面は第35層上面である。第5検出面は風化頁岩盛土層上面である。この層は厚さ約1.5mで、その下部には暗灰色砂質粘土（第43層）が堆積。上面は標高3.1m。上部には植物遺体、有機物、下駄、木器片、杭などの古墳時代～中世の遺物を含む。下部は粗砂で、標高2m前後で湧水する。

3) 遺構と遺物 (Fig. 12・13、PL, 6・7・11)

第1～3検出面での遺構はいずれも近代以降のものである。個別説明は省略する。

第4検出面は第1トレンチで検出した整地層が当該地点でも確認できた。またこの層を切る掘立柱建物の柱穴群を検出した。柱穴は径20～30cmで板石を礎板に持つもの(SP103など)がある。建物の規模および性格等は復元できなかったが、江戸期の遺構は第35層を境にして、二時期に分かれることが予想された。第5検出面では第6トレンチSA73と同じレベルで、礫群SX100を検出した。SA06等と同様な塀の基礎の一部と思われる。

20は肥前系染付小壺である。21・25は同安窯系青磁皿と椀。22は楽焼きの焼塩壺で塀名を捺印している。23は唐津系皿。体部下半～高台は露胎で砂目が付く。24は中国産白磁碗Ⅴ類。26は白磁皿。27・28は軒平瓦片。29は三巴文の軒丸瓦。瓦はいずれも焼成があまい。

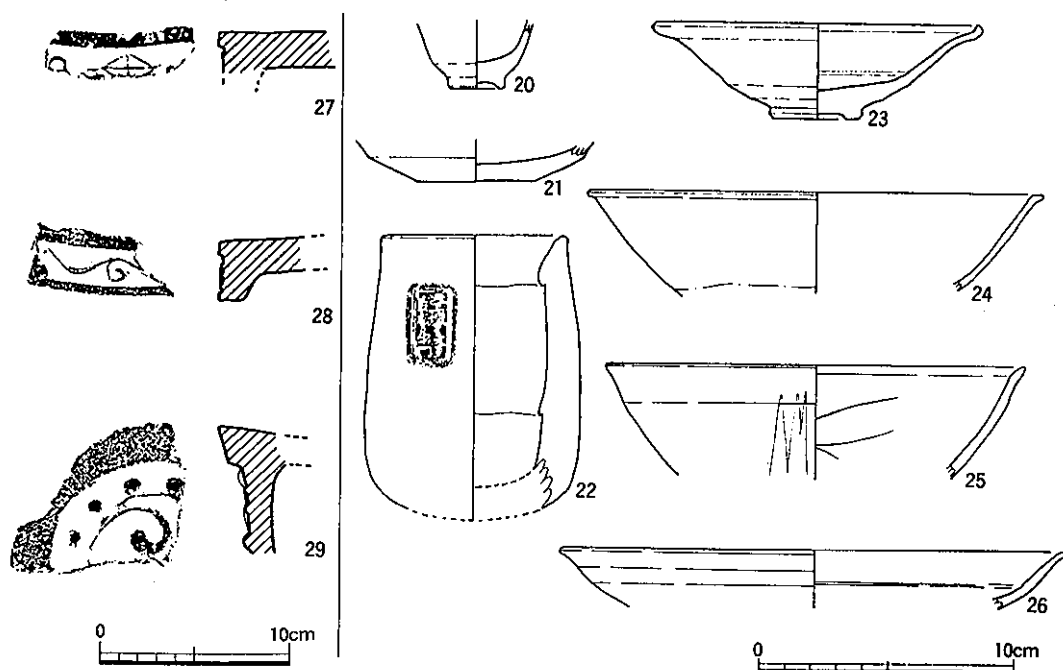


Fig. 12 第7トレンチ出土遺物実測図(1/3・1/4)

第7トレンチ土層所見

- | | |
|---------------------|------------------|
| 1. 表土(真砂盛土) | 22. 黒灰色土層 |
| 2. 盛土 | 23. 茶灰色土層(黄褐色土混) |
| 3. 盛土 | 24. 暗灰色粘土層 |
| 4. 現代攪乱 | 25. 暗灰色砂層 |
| 5. 黒色土 | 26. 灰褐色シルト層 |
| 6. 黒灰色砂質土層 | 27. 黄灰色土層 |
| 7. 暗茶灰～黒灰色土層(瓦溜り) | 28. 暗灰色細砂層 |
| 8. 暗黄灰色砂質土層 | 29. 黄褐色砂質土層 |
| 9. 茶褐色砂質土層 | 30. 黄褐色土層 |
| 10. 暗茶褐色砂質土層(黄褐色土混) | 31. 黒灰～茶灰色土層 |
| 11. 茶褐色砂質土層 | 32. 茶灰色土層 |
| 12. 暗茶褐色砂質土層 | 33. 暗茶褐色粗砂土層 |
| 13. 黒灰色砂質土層(灰色土混) | 34. 黒色砂質土層 |
| 14. 暗黄灰～茶灰色砂質土層 | 35. 灰～灰褐色粘砂土層 |
| 15. 茶灰色砂質土層 | 36. 暗灰色砂質土層 |
| 16. 黒灰～暗灰色砂質土層 | 37. 黄褐色粘土層(疎混) |
| 17. 灰色砂層 | 38. 暗灰色砂質土層 |
| 18. 茶褐～黄褐色砂質土層 | 39. 暗灰～黒灰色粘砂土層 |
| 19. 黒灰～暗灰色土層 | 40. 暗青灰色土層 |
| 20. 暗黄褐色砂質土層(炭混) | 41. 暗灰～暗黄灰色土層 |
| 21. 黒灰～暗黄灰色土層 | 42. 暗褐色土層 |

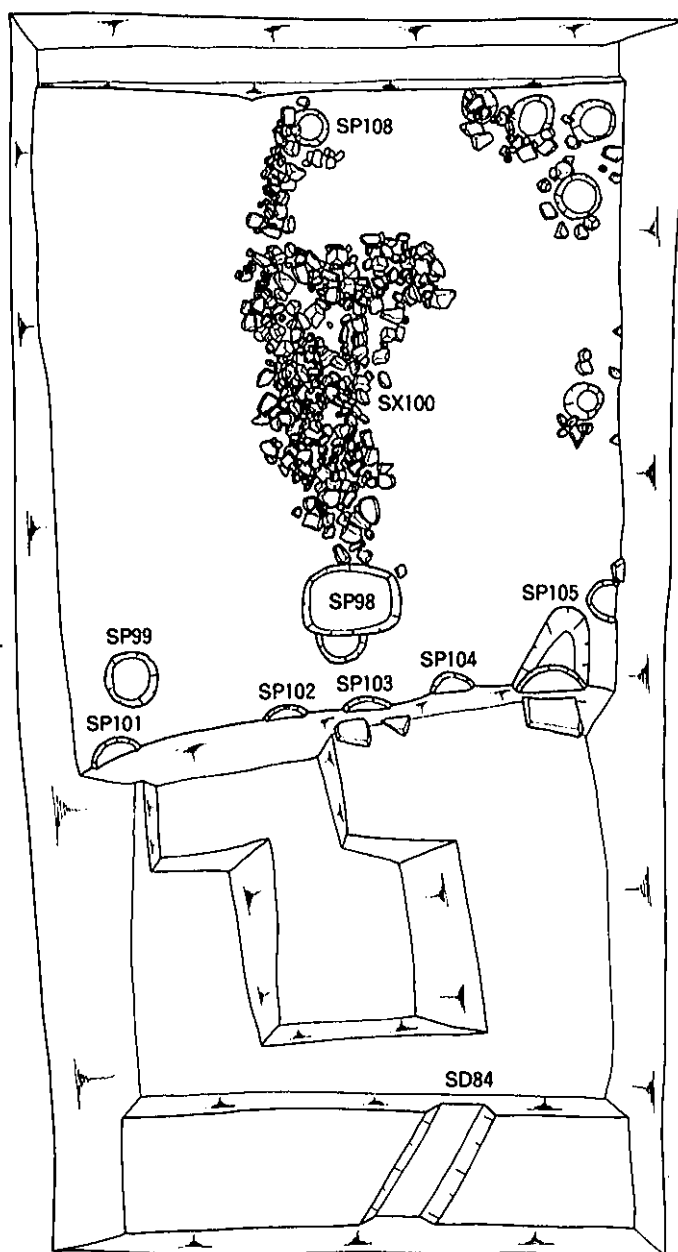
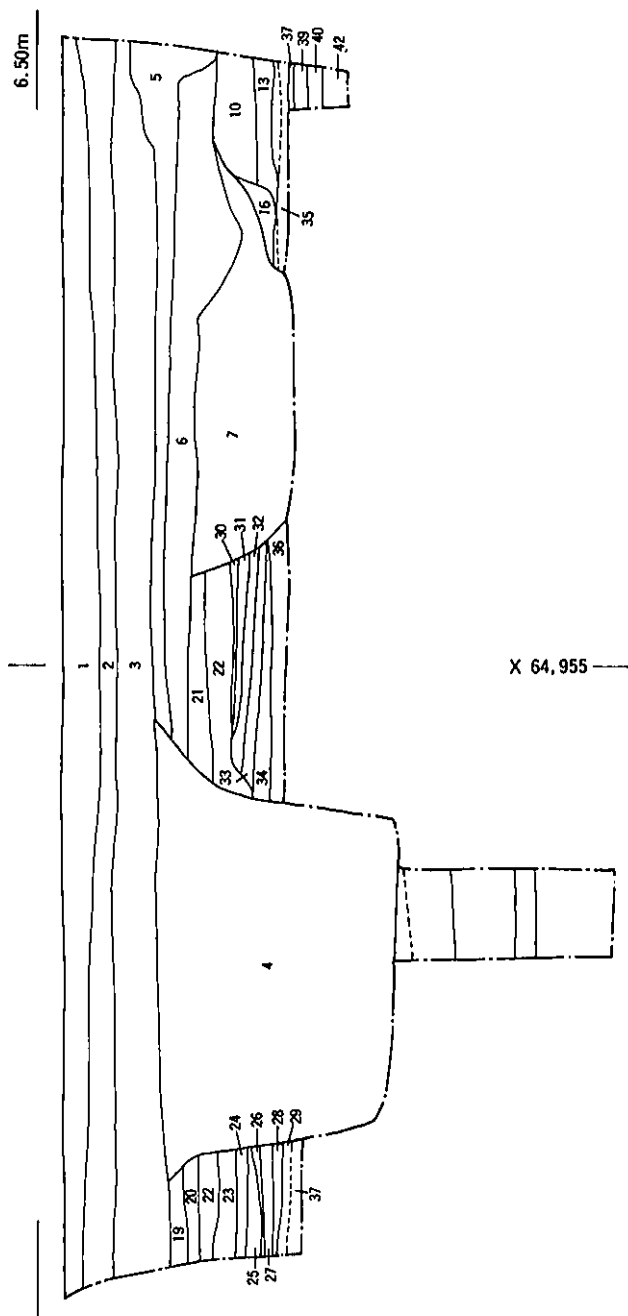
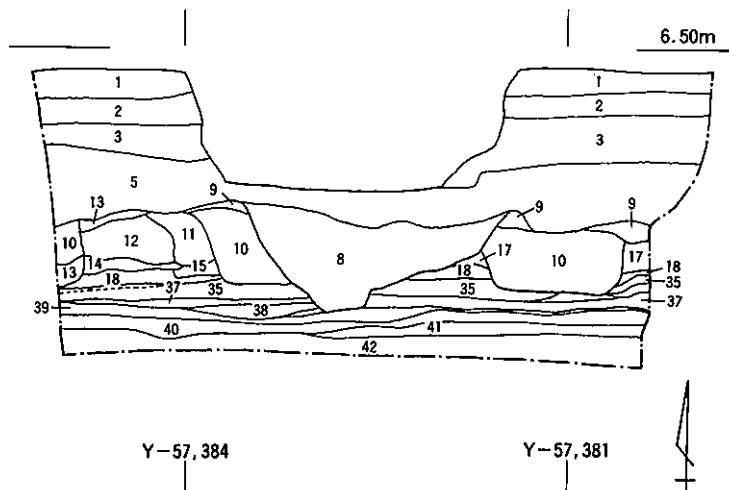
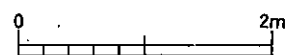


Fig.13 第7トレンチ遺構平面および断面図(1/60)



(7) 第8トレンチ

1) 位置 (Fig, 2)

本トレンチは第7トレンチから南側へ20m離れた地点に位置する。この地点では、第1・4トレンチで検出したSA06・07の延長部および江戸期の整地層の遺存状況の確認が調査の主目的である。

2) 土層堆積状況と検出面 (Fig, 14, PL, 8)

北壁から西壁にかけては昭和40年代の家屋廃材の廃棄土壌による攪乱の他、近代以降の溝、土壌によって江戸期の整地層は寸断されている状況である。部分的に比較的良好な状況で遺存している。第1～15層は近代～現代の整地、土壌、攪乱である。第16～21層は近世～近代にかかる時期の盛土等である。各トレンチの第1検出面に相当する青灰色と黄褐色粘質土の整地層は第24層と思われるがこの地点では明確ではないため、標高4.8m前後の面を第1検出面とした。この地点においても第1トレンチで検出した灰白色砂整地層が認められた(第25層)。第2検出面は第25層下面で、標高4.5～4.6mの面である。この面の下部には風化頁岩盛土層がみられる。おそらく第7トレンチと同様1.5m以上の厚さで堆積しているものと思われる。

3) 遺構と遺物 (Fig, 14, PL, 8)

第1検出面では溝3条(SD109・110・118)、柱穴がある。いずれも近代以降のもの。

SD109・110は東西に直線的に延びる溝である。主軸方向はN-68°-Eである。先後関係はSD109→110で、SD109北壁は残っていない。SD110の幅は0.80m。断面形はU字形。

第2検出面では、柱穴、礫群SX123を検出した。柱穴は上層からのものである。礫群は江戸期のもので、第1トレンチSA06～08、第4トレンチSA41に関連すると思われる。第38層上面に礫石は分布しておりレベルもほぼ同じ面である。

第8トレンチ土層所見

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 1. 表土(真砂盛土) | 26. 灰色粘土~砂土層 |
| 2. 盛土 | 27. 赤褐色粗砂層(鉄分沈着) |
| 3. 盛土 | 28. 暗灰~灰色砂層 |
| 4. 灰~灰褐色砂質土層 | 29. 暗灰色砂質土層(瓦・粗砂を含む) |
| 5. 灰褐色砂質土層 | 30. 灰色砂層 |
| 6. 褐色砂礫層 | 31. 灰~灰白色粗砂層(上面に鉄分沈着) |
| 7. 暗褐~灰褐色瓦礫層 | 32. 赤褐色粘質土 |
| 8. 暗褐色粘質土層 | 33. 暗青灰色シルト層 |
| 9. 褐色砂質土層 | 34. 褐色砂質土層 |
| 10. 灰褐色砂質土層 | 35. 灰色シルト層 |
| 11. 褐色砂質土・風化礫黒色土の混合土 | 36. 暗灰色シルト層(木炭片・鉄分沈着) |
| 12. 暗灰色砂質土層 | 37. 褐色粗砂層(瓦含む) |
| 13. 灰褐色粘質土層 | 38. 明褐色砂質土・灰白色粘土・頁岩の混合土 |
| 14. 明褐色砂質土層 | 39. 灰色シルト層(木炭片・鉄分沈着) |
| 15. 明褐色砂質土層(粗砂) | 40. 灰黄褐色砂質土層 |
| 16. 灰褐色砂質土層(黄灰色風化礫を含む) | 41. 黄灰~灰色シルト層 |
| 17. 暗褐色粘質土・灰褐色土の混合土 | 42. 灰茶色粘質土層 |
| 18. 灰色砂質土層 | 43. 暗灰色シルト層(木炭片・鉄分沈着) |
| 19. 褐色砂質土層(黄白色礫を含む) | 44. 褐色砂質粘土層 |
| 20. 黄褐色粘質土 | 45. 青灰色シルト層 |
| 21. 明褐色粘質土層 | 46. 灰茶褐色粘土層 |
| 22. 暗褐色砂質土層 | 47. 整地層(風化礫を含む) |
| 23. 黒灰色土層(木炭片を含む) | |
| 24. 灰色砂質土と黄白色粘土混合土 | |
| 25. 灰白色粗砂層 | |

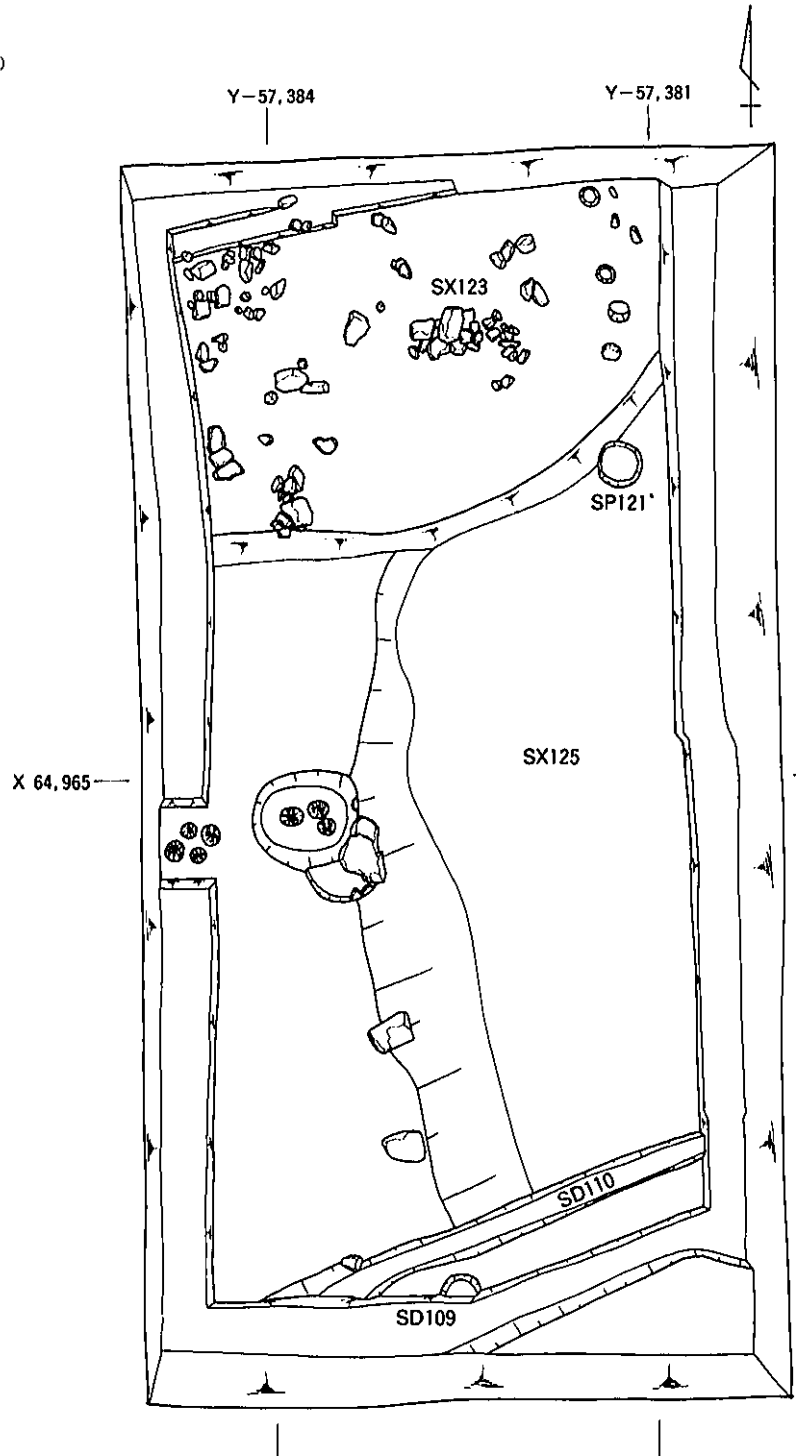
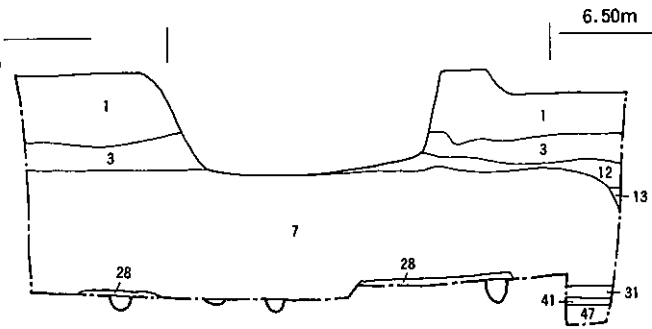
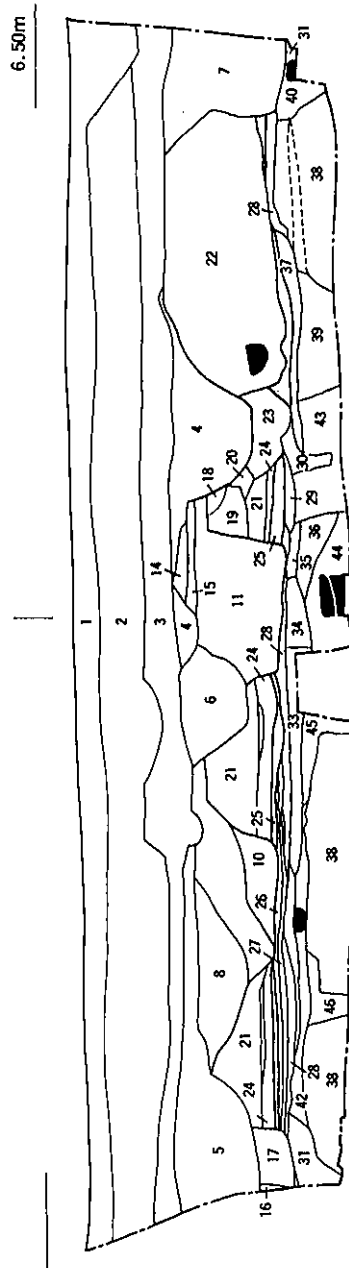
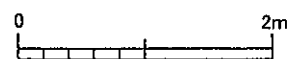


Fig.14 第8トレンチ遺構平面および断面図(1/60)



(8) 第9トレンチ

1) 位置 (Fig. 2)

第9・10トレンチは、公園施設等の制約によって、第1～8トレンチの東ブロックから西へ約50mほど離れた位置に設定した。この地点は、東ブロックよりも現況で約1mほど低い平坦面となっている。この高低差は、調査の結果では昭和40年代の公園整備時の盛土（真砂土）厚の差によるものである。両トレンチでは、明治期の地形図に表記されている池状遺構の有無と第II期調査区中央部から西側の土層堆積状況を調査の主眼にした。

2) 土層堆積状況と検出面 (Fig. 16, PL. 8)

この地点は東ブロックとは異なり、近現代の攪乱は少ないが、第1～7トレンチで第1・2検出面とした各土層はほとんど残っていない。第1～17・32・33・39～41層は戦後の埋土で、窪地もしくは池の埋土である。第1検出面は第22・26層上面に設定した。標高4.10m前後の面である。第26～29層は池状の窪地の覆土である。トレンチ中央から東南側にかけて第37層上面から深さ約1mほど堆積している。瓦や礫石が出土している。江戸期の盛土は西壁では第26層下部もしくは37層以下と思われる。地山面の深さは未確認である。

3) 遺構と遺物 (Fig. 15・16, PL. 8・11)

本トレンチでは、遺構は検出されていない。検出面とした第22・26層は第1トレンチなどで検出した灰白色砂質粘土層と土質が類似する。東ブロックではほぼ水平に4.6m前後の面で分布していたが、西側の方がレベル差で約50cmほど低いことから造成面高が東西で異なっていた可能性がある。

遺物は、第24～26層で散発的に出土した。30は施釉陶器壺底部である。内面に施釉、外面は露胎である。31・32は唐津系皿高台片である。いずれも内面見込みと高台埴付に砂目跡が付着している。釉薬は不透明な飴色で、削り出し高台部分は露胎である。33は、肥前系描鉢である。降し目は、8本単位。暗赤褐色の鉄釉を口縁部外面に施釉。

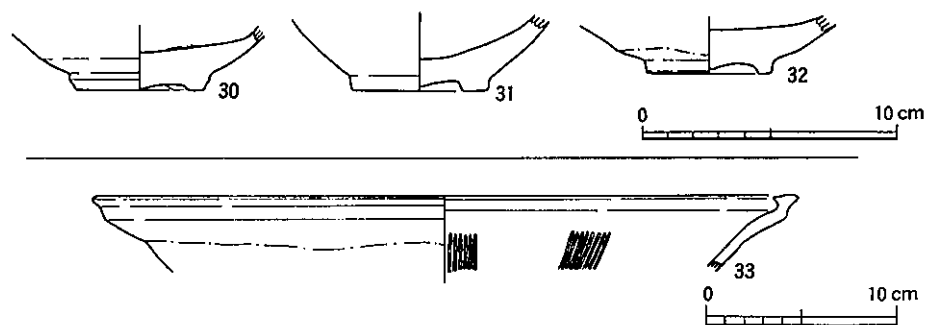


Fig. 15 第9トレンチ出土遺物実測図 (1/3・1/4)

第9トレンチ土層所見

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 1. 表土(真砂盛土) | 25. 黄褐色土層 |
| 2. 盛土 | 26. 茶褐色土層 |
| 3. 盛土 | 27. 暗茶褐色土層(炭化物片を含む) |
| 4. 茶褐色粘質土層 | 28. 暗茶褐色土層 |
| 5. 暗赤褐色砂質土層 | 29. 茶褐色粘質土層 |
| 6. 明茶褐色粘質土層 | 30. 青灰色砂質土層 |
| 7. 茶褐色土層 | 31. 黄褐色砂質土層 |
| 8. 暗茶褐色土層 | 32. 茶褐色粘質土・暗茶褐色砂質土混合層 |
| 9. 茶褐色砂質土層 | 33. 暗黄褐色砂質土層(疎・炭化物) |
| 10. 暗茶褐色砂質土層 | 34. 青灰色粘質土層 |
| 11. 灰白色砂質土層(金属片を含む) | 35. 暗黄褐色粘質土層 |
| 12. 暗茶褐色砂質土層 | 36. 暗黄褐色砂質土・赤褐色粘質土混合層 |
| 13. 灰白色砂質土層(金属片を含む) | 37. 黄褐～暗茶褐色粘質土層 |
| 14. 黄褐色土層 | 38. 黄褐色粘質土層 |
| 15. 暗茶褐色土層 | 39. 茶褐色土層 |
| 16. 灰白色粘質土層 | 40. 黄褐色土層(疎を含む) |
| 17. 暗黄褐色土・黄褐色土混合層 | 41. 暗茶褐色砂質土層 |
| 18. 黄褐色粘質土層 | 42. 暗黄褐色土層 |
| 19. 暗茶褐色土層 | 43. 暗青灰色砂質土層 |
| 20. 乳白色粘土層(疎を含む) | 44. 暗茶褐色砂質土層 |
| 21. 暗灰白色粘土層 | 45. 青灰色粘質土層 |
| 22. 黄褐色粘質土層 | 46. 暗黄褐色粘質土層 |
| 23. 暗黄褐色土・黄褐色粘質土混合層 | 47. 黄褐色粘質土層 |
| 24. 暗黄褐色土層 | |

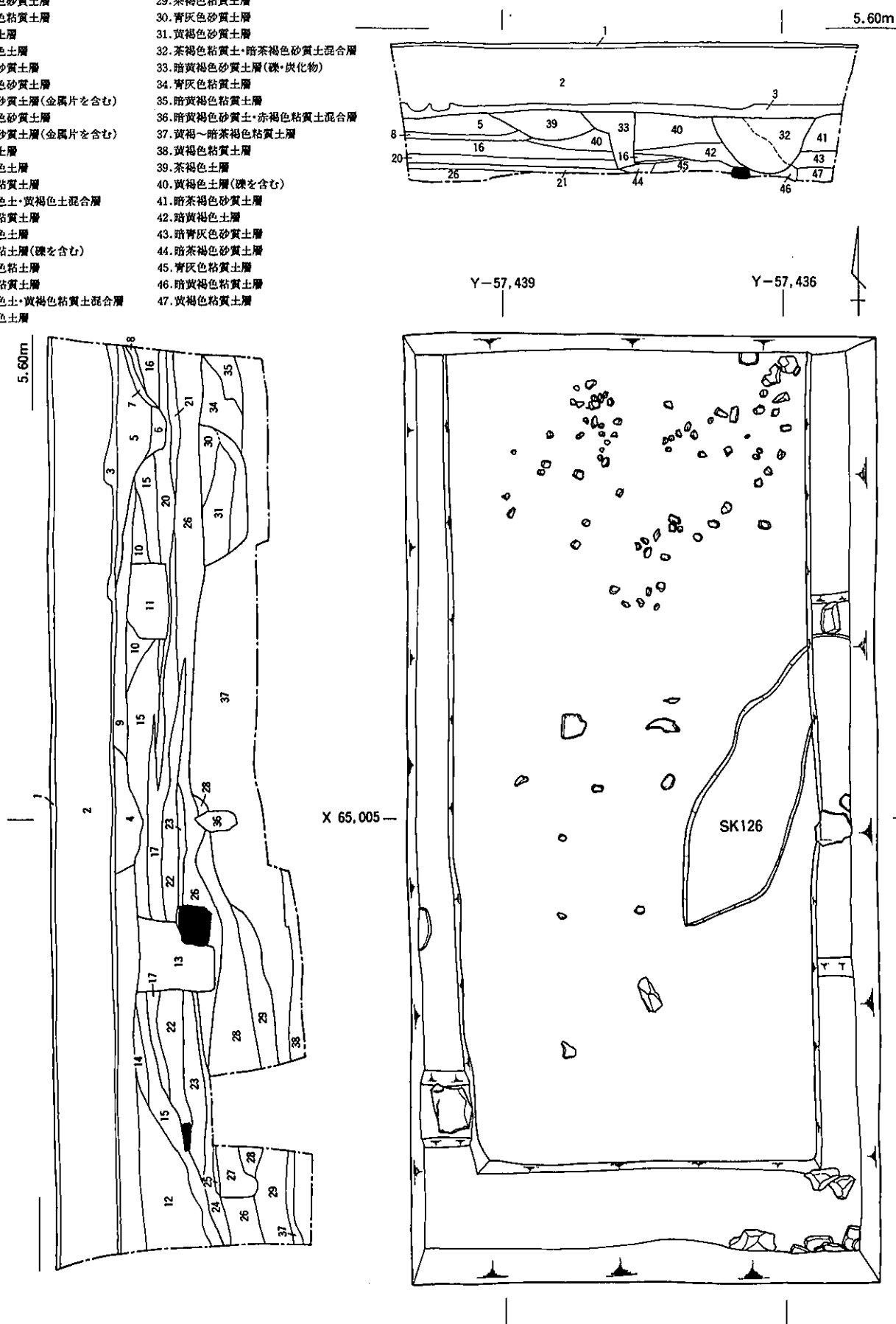


Fig.16 第9トレンチ遺構平面および断面図(1/60)

(9) 第10トレンチ

1) 位置 (Fig, 2)

第9トレンチから10m離れた南側に位置する。このトレンチでは第9トレンチで確認した池状の窪地の範囲および福岡城堆積の状況について観察した。

2) 土層堆積状況と検出面 (Fig, 18、PL, 9)

本トレンチにおいて、築城時期の盛土層は第17層以下と考えられる。第1～7トレンチで第1・2検出面とした各土層は残っていない。西壁においては、第9～12・15層が池状の窪地の埋土で、戦後間もない時期の所産である。また南側においては7層下部から始まる建物地業と考えられる礫群 (SX128) が東西に5m以上、南北に3m以上の範囲で確認できた。礫群中からは発行年が明治20年の銅銭が出土している。

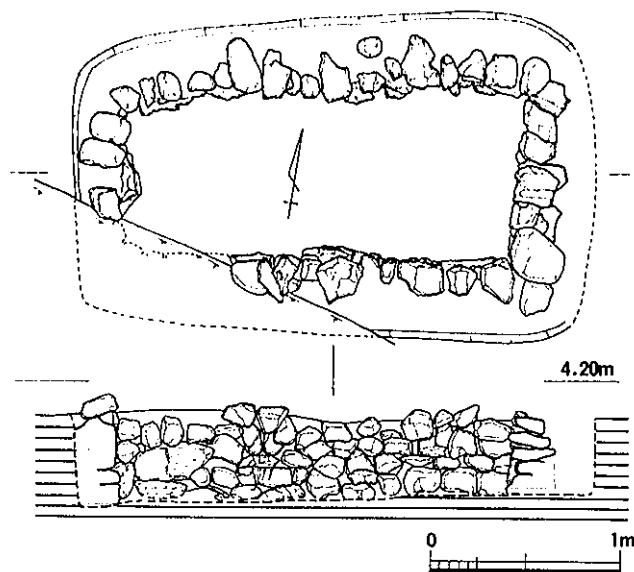
3) 遺構と遺物 (Fig, 17・18、PL, 9・11)

池状遺構SD129、土塋SK130、建物地業SX128、石組遺構SX131がある。SX131以外は近代以降のものである。

SD129は第9トレンチ南側の窪地とは一連の遺構であり、明治期の「歩兵百八十七連隊駐屯図」および「福岡二十四連隊鎮魂紀念之図」に表現された池の一部と考えられる。江戸期まで遡るかどうかは不明である。最終的に埋め戻されたのは戦後間もない時期である。

SX128は一抱えほどの扁平な礫石を積み上げている状況からみて、何らかの構造物の地業跡と考えられる。位置からみて先述した図絵中に描かれた記念塔の土台部分の可能性はある。

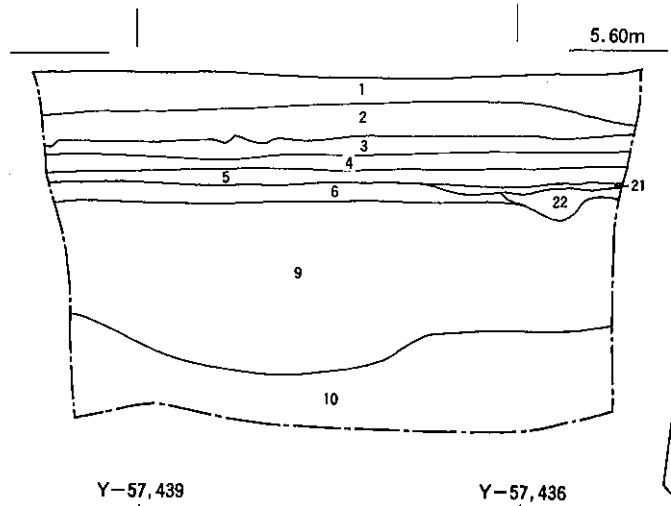
SX131は内法で長さが2.08m、最大幅が0.95m、深さ0.4mを測る石組遺構である。平面形は西側の小口幅がやや狭い長方形である。下部には木炭片を多く含む黒灰色粘質土が堆積している。屋敷地内における便槽の可能性はある。



Fig, 17 第10トレンチ石組遺構SX131平面および断面図(1/40)

第10トレンチ土層所見

1. 表土(真砂盛土)
2. 盛土
3. 盛土
4. 盛土(真砂土・赤褐色粘土層)
5. 木炭層
6. 整地層(褐色粘質層・風化礫岩・砂の混合土)
7. 暗灰色砂質土層
8. 暗灰色砂質土層(砂礫・木炭片を含む)
9. 暗灰色砂質土層(風化礫岩を含む)
10. 暗灰色砂質土層
11. 黒灰色砂質土層(砂礫を含む)
12. 灰色砂質土層(砂礫を含む)
13. 灰褐色砂質土層(木炭片・礫を含む)
14. 褐色粘質土層(風化礫・粘土を含む)
15. 暗灰褐～暗灰色砂質土層(風化礫小片を含む)
16. 黄褐色礫層
17. 茶褐色砂質土層(風化頁岩小礫を含む)
18. 黄灰色粘質土層(粗砂を部分的に含む)
19. 茶褐～褐色粘質土層(礫を含む。柱穴か)
20. 黄灰色風化頁岩を主とする盛土整地層
21. 灰白色粗砂層
22. 灰褐色砂質土層(風化頁岩小片を含む)



Y-57,439

Y-57,436

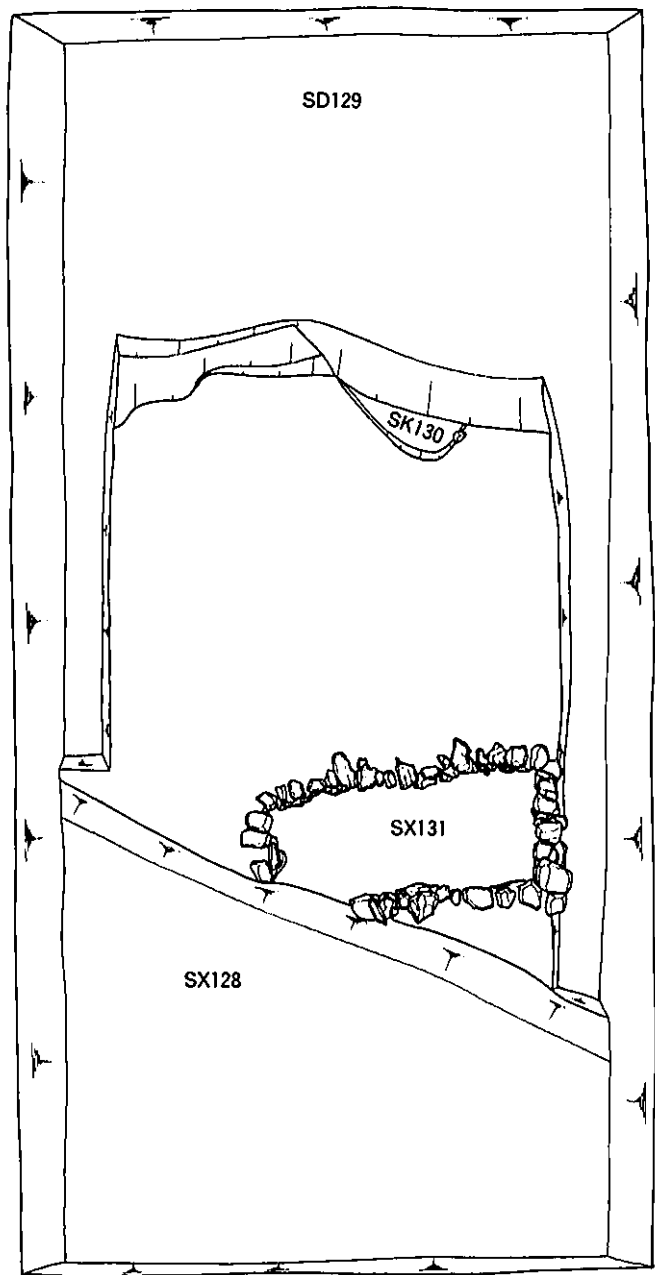
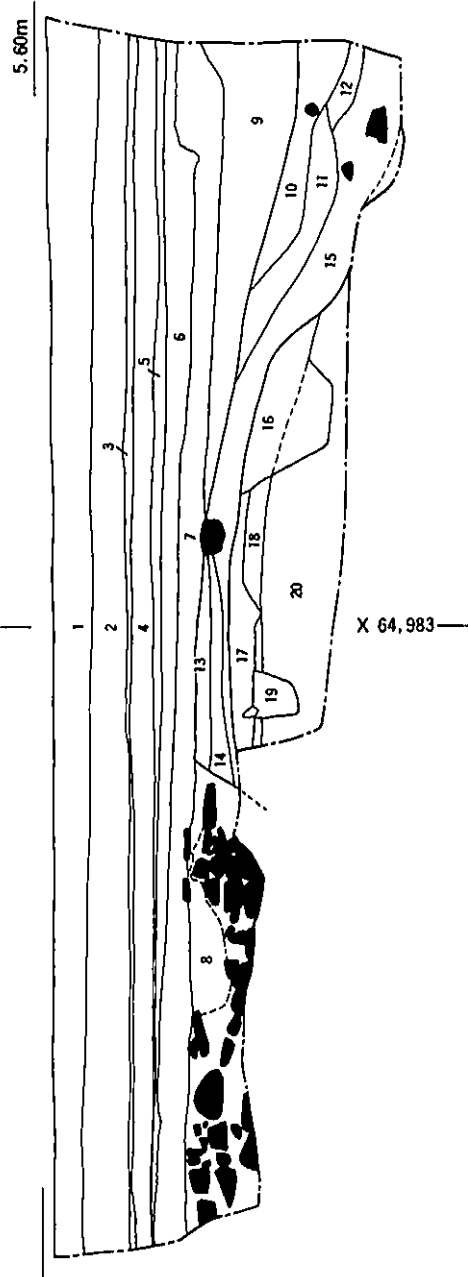


Fig.18 第10トレンチ遺構平面および断面図(1/60)



III まとめ

平成5年度調査の目的は、第Ⅱ期調査計画を円滑に実施するための資料を得る必要があるために、各時代の遺構の残存状況や旧地形の把握を行うことにあった。

9ヶ所に設定したトレンチ調査では、その多くで大規模な攪乱層が見られ、遺構の残存状況は良好とはいえない。

遺構は、塀の基壇、柱穴等を検出したが、建物規模の確定や城絵図等の史料との整合には至らなかった。検出した遺構の時期は、17～19世紀に比定されるものである。鴻臚館に関わる遺構、遺物は検出されなかった。出土遺物は、その大半が近世以降に比定されるが、造成土中から5世紀末～6世紀初頭に比定される須恵器も出土しており、城域内の高台において古代の遺構の存在を示すものと思われる。

築城以前の地形は、第1・7トレンチの状況から、第Ⅱ期調査対象地域の東半部は御鷹屋敷と呼ばれる小山が現在よりも西方に50m前後広がっており、小山以西は砂原が存在していたことが復元される。したがって、築城に伴う砂原を埋めるために膨大な量の風化頁岩を用いたが、その用土の確保に御鷹屋敷と呼ばれる小山はもちろんのこと、城域内の他地からも供給を必要としたことは容易に想像される。

今回の調査では、初めて福岡城に関連する遺構の存在を確認したが、その意義は大きい。今後実施される第Ⅱ期調査計画の中で、遺構の変遷等の解明を行いたい。

KŌROKAN

The Kōrokan was originally called the “Tsukusi-no-murozumi”, but the name was changed to “Kōrokan” in the early Heian period. The Kōrokan was used as an official guest-house.

The Kōrokan, from the second half of the 7th century to the 11th century, not only served as an entertaining and boarding facility for delegates and merchants from Tang and Silla, and Japanese envoys and students going to Tang and Silla, but also served as an international trading post. Moreover, the Kōrokan was the most advanced place of international exchange in ancient Japan.

The year 1993 marked the first year of the second excavation, the main purpose of which, was to confirm the existence of any sites on the northwestern part of the hill on which the Kōrokan was located. To grasp a general understanding of the excavation area, nine trenches were dug. These trenches resulted in the unearthing of the foundations of a 17-19th-century earthen wall, and the foundation platform of a building. The exact scale of the building, however, was unable to be confirmed. Topographical studies suggest the greater part of the excavation area was a sandy plain in ancient times. No archaeological features or artefacts related to the Kōrokan were discovered during this excavation.

圖 版

(PLATES)



(1) 発掘調査地全景
西から



(2) 発掘調査地全景
北から



(3) 調査風景
北から

(1) 第1トレンチ
第2検出面SA06～08
西から



(2) 第1トレンチ
第2検出面全景
南から



(3) 第1トレンチ
第2検出面SA06 西から



(4) 第1トレンチ
第2検出面SA07 西から



(5) 第1トレンチ
第2検出面SA08 西から

(1) 第3トレンチ
第3検出面SX24
東から



(2) 第3トレンチ
第4検出面南半部SK25
東から



(3) 第4トレンチ
第1検出面全景
東から



(1) 第5トレンチ
第1検出面全景
南から



(2) 第5トレンチ
第1検出面SB63
東から



(3) 第5トレンチ
第2検出面全景
南から



(4) 第5トレンチ
第2検出面SA65
北から



(1) 第6トレンチ
第1検出面全景
東から



(2) 第6トレンチ
第2検出面西半部
北から



(3) 第6トレンチ
第3検出面西半部
北から



(1) 第7トレンチ
第1検出面全景
東から



(2) 第7トレンチ
第3検出面北半部
東から



(3) 第7トレンチ
第4検出面北半部
東から



(1) 第7トレンチ
第5検出面北半部
東から



(2) 第7トレンチ
第5検出面SP101～105
南から



(3) 第7トレンチ
第5検出面SP103礎板
南から



(4) 第7トレンチ
第5検出面SP105礎板
南から



(1) 第8トレンチ
第1検出面全景
東から



(2) 第8トレンチ
第2検出面全景
東から



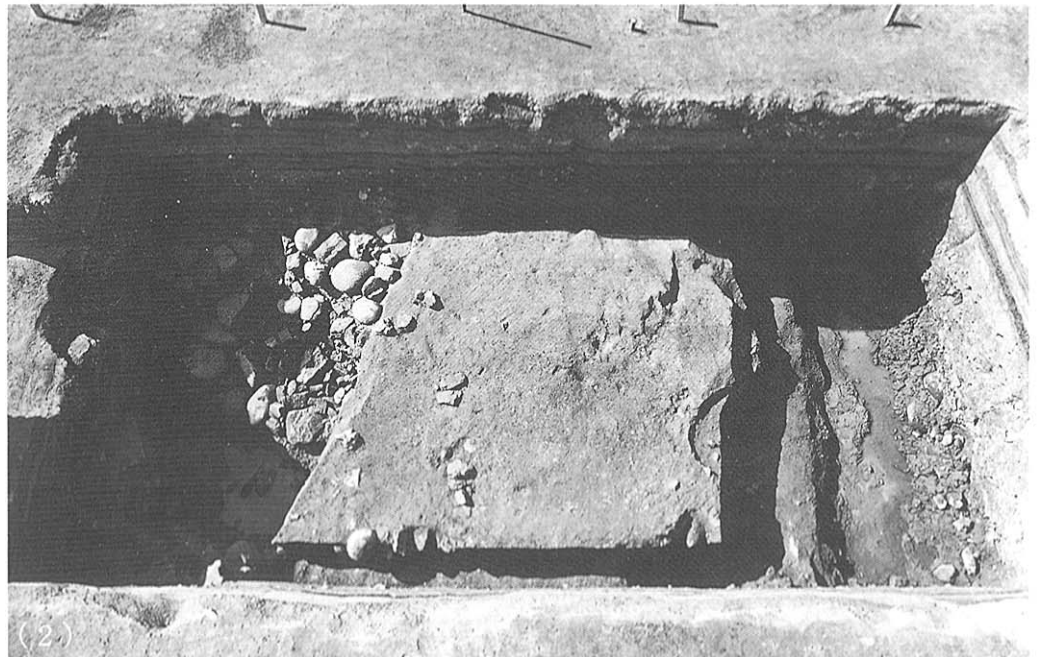
(3) 第9トレンチ
第1検出面全景
東から



(1) 第10トレンチ
第1検出面全景
東から

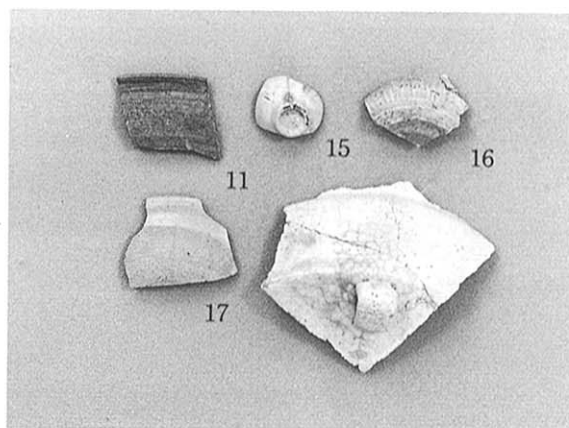
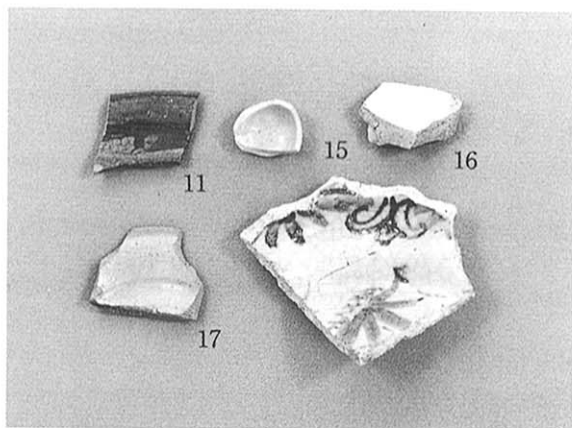
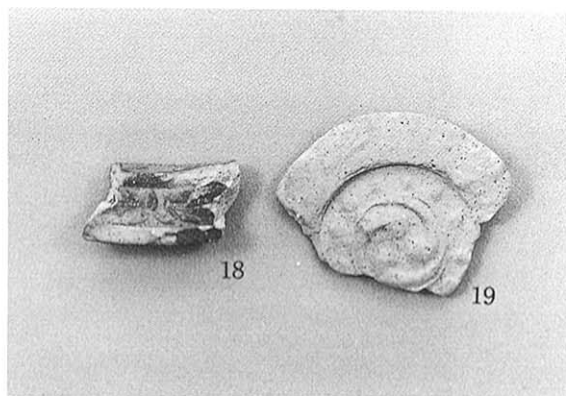
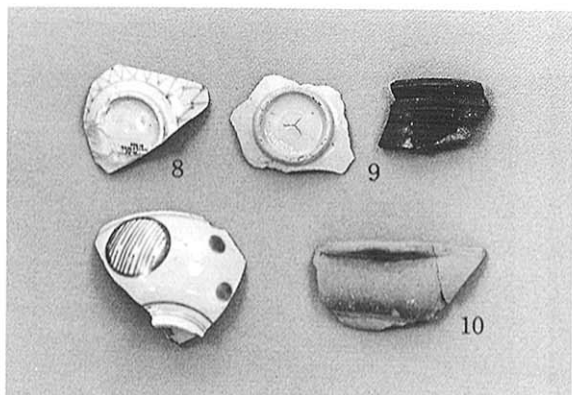
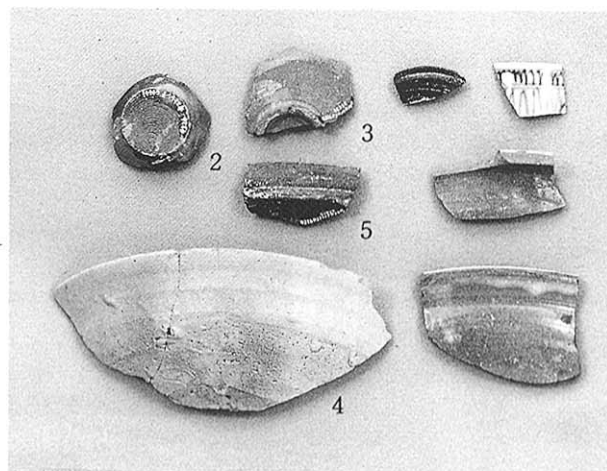
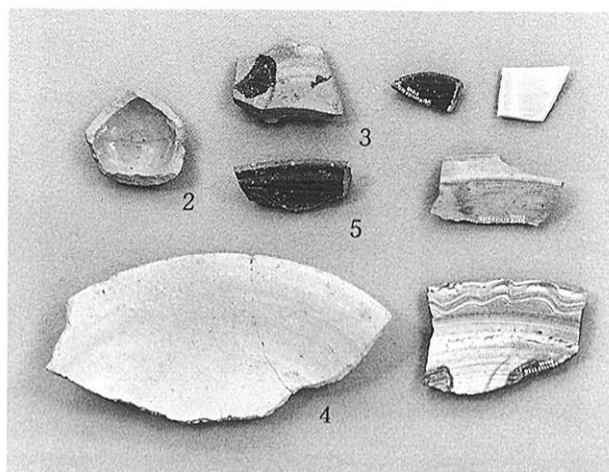


(2) 第10トレンチ
第2検出面全景
東から



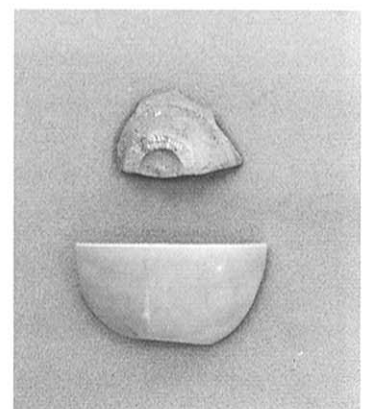
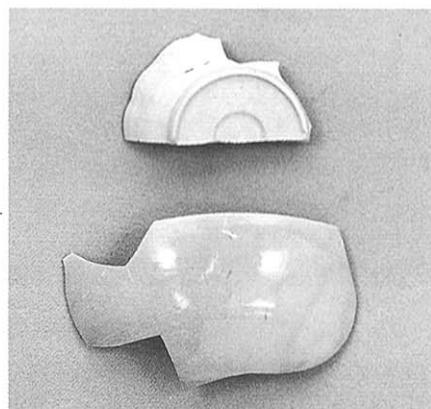
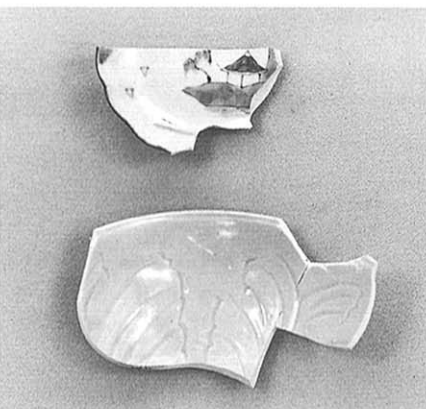
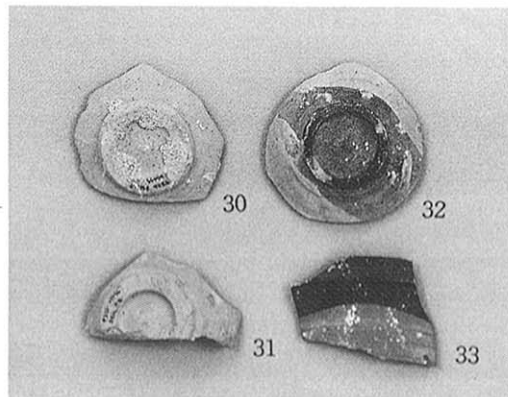
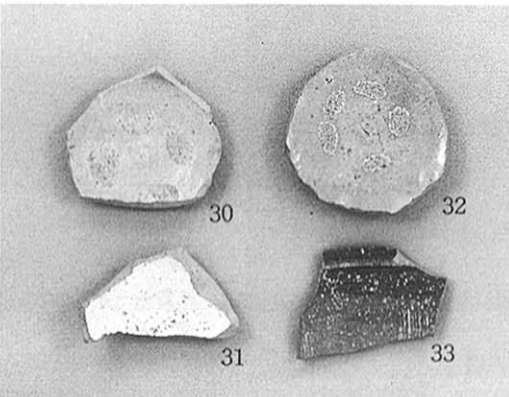
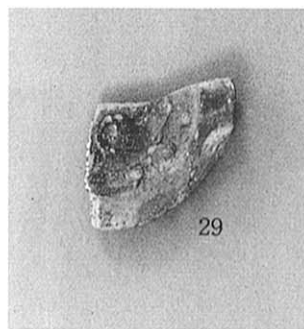
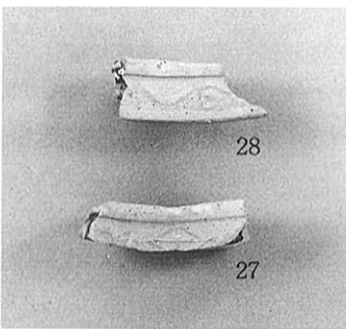
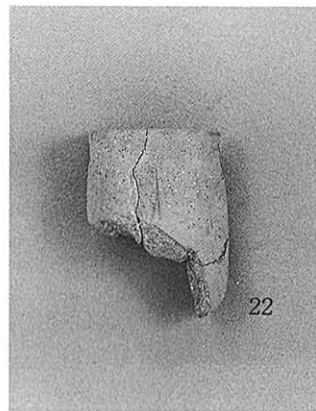
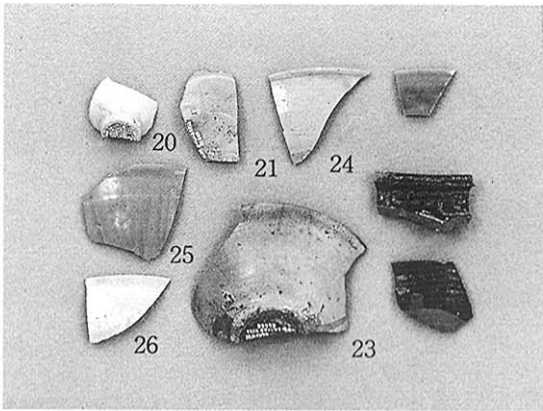
(3) 第10トレンチ
第2検出面SX131
南から



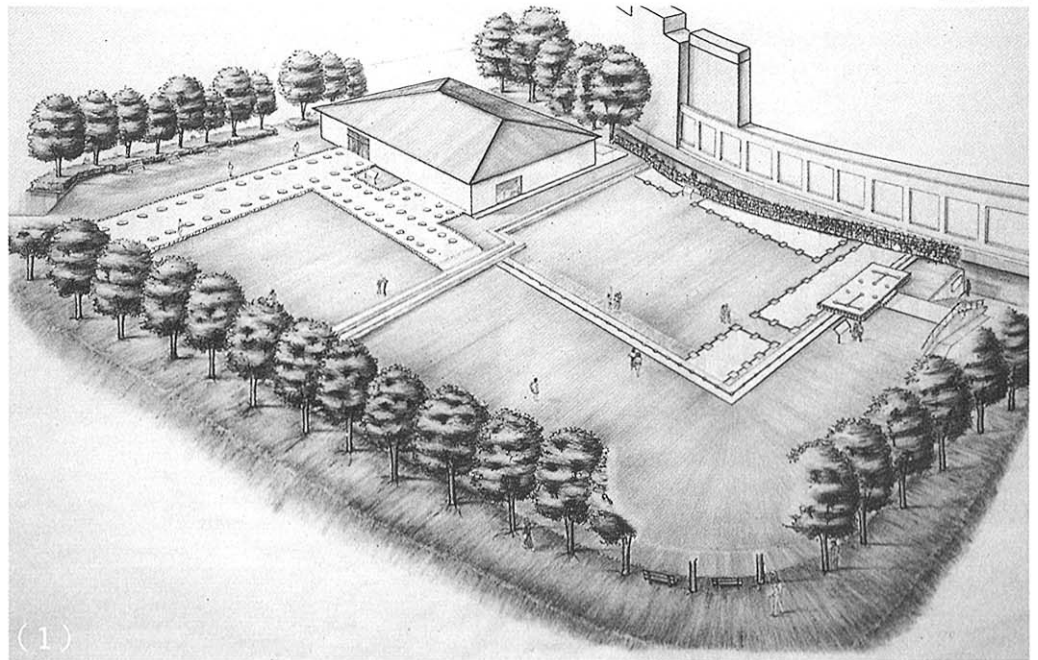


トレンチ出土遺物（1）

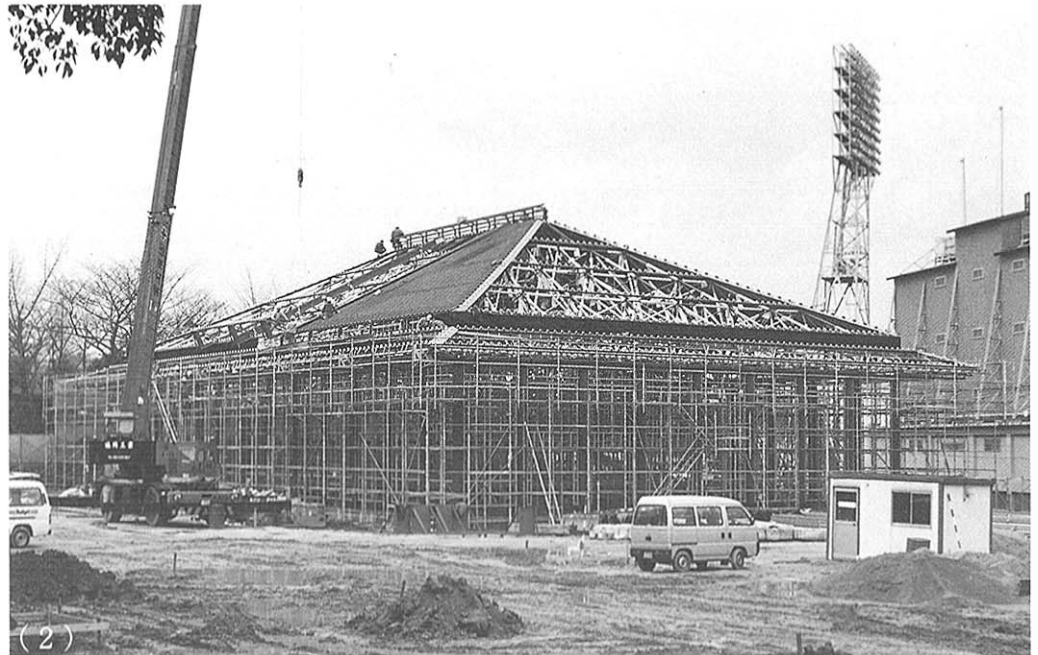
（2～6；第3トレンチ、7；第4トレンチ、8～10；第5トレンチ、11・15～19；第6トレンチ）



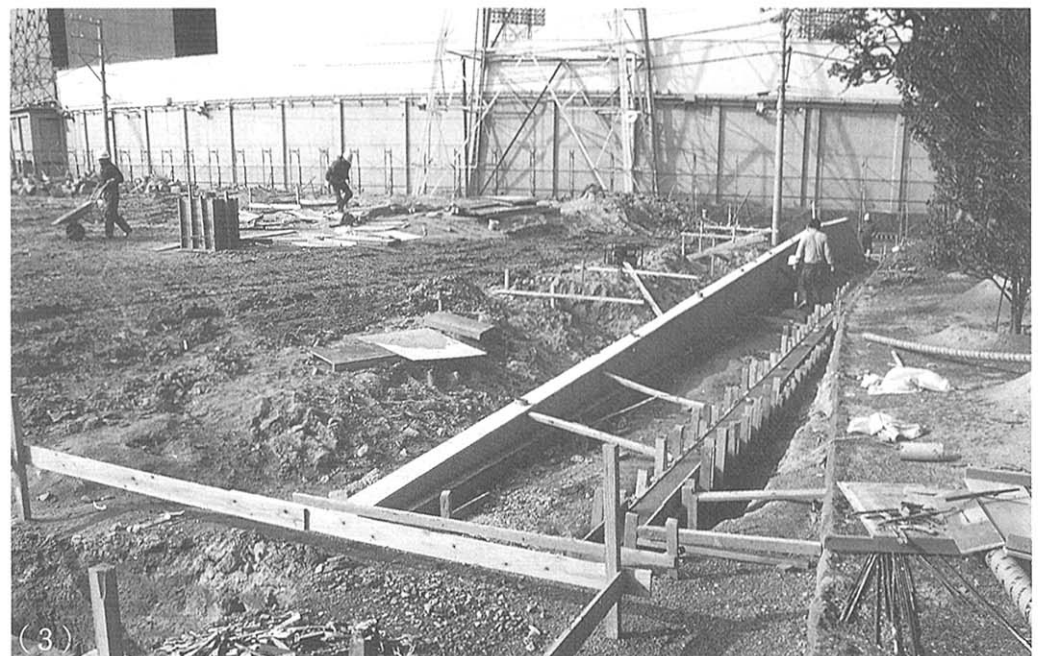
トレンチ出土遺物（2）
（20～29；第7トレンチ、30～33；第9トレンチ）



(1)遺跡整備計画図



(2)展示館建築状況



(3)遺跡整備状況

鴻 臚 館 跡 5

福岡市埋蔵文化財調査報告書

<第416集>

編集・発行

福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目8-1

平成7年3月29日

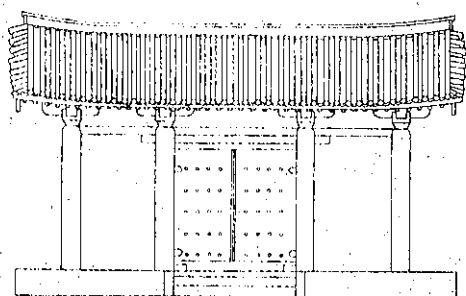
印刷

今井印刷株式会社

福岡市中央区赤坂一丁目2-18

KŌROKAN

Excavation and Studies of
Kōrokan Ruins
in Fukuoka



March 1995

THE FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION
JAPAN